
FAIRY TAIL 鍵の物語

こーこうせい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL 鍵の物語

【Nコード】

N7481X

【作者名】

こーこうせい

【あらすじ】

島から異世界へ飛ばされたソラ。
ついた場所は魔法の世界！！島へ戻る方法を探すためにフェアリーテイルへ！！

ソラは無事島へ帰れるのか！？

あくまで予定ですが、たぶんKH方面はほとんど進みません。悪しからず。

第1話 火竜（前書き）

どもども！こーこーせいです！！

もう一個の話が半分シリ阿斯ならこっちはハイテンションで！！

注意点！

（1）自己解釈大有り

（2）矛盾点MAXな気がしますです。

（3）クロスオーバーですがほぼKH要素は皆無！！リク？カイリ？きつと元気さ！！

こんな感じですがよろしくお願いします！

無理な方は回れ右！！で、よろしくです！！

この間までネタばれみたいになっちゃったのは秘密！！今回は本編です！！

第1話 火竜

「あ、あの、お客さま？だ、大丈夫ですか？」

「あい！いつものことなので」

そこには列車に乗った桜色の髪の男と青い猫がいた。

男は今にも吐きそうな顔をしている。いわゆる乗り物酔いだ。

「無理！！もう二度と列車には乗らん…」

「情報が確かならこの町に火竜サラマンダーがいるはずだよ。いこ」

「ちょ……ちょっと休ませて……」

「うんうん」

男の話をほぼガン無視して先に進む青い猫。

猫は一度も後ろを振り返ることもなく先に列車の外へ出た。そして後ろを見て男がいないことを見て一言。

「あ、発車しちゃった」

遠いところから「たゞすけ〜て〜」と聞こえた。

魔法

それは人々の生活に根付き、かけがえのないものになっている。
その魔法を使い職業とするものたちを人々は『魔導士』と呼ぶ。

魔導士たちは皆『ギルド』と呼ばれる場所に所属する。魔導士達は
ギルドで働きやっと一人前といえるのだ。

第一話『サラマンダー火竜』

「ええ〜っ！？この街って魔法や一軒しかないの？」

「ええ、元から魔法より漁業が盛んな街ですからね」

そこにはいかにも今風な格好の女といかにも魔法！って感じの男。
女の名前はルーシィ。魔法を求めいろいろな街を旅しているようだ。
今いるのはハルジオンという、港町。元来から漁業が盛んでその名前は全世界に轟いている。

「はあ、無駄足だったかしら？」

「まあまあ、そう言わずに見てってくださいな！新商品だってちゃんとそろってますよ？女の子に人気なのはコレ！色替！カラーズ！その日の気分に合わせて服の色をチェンジ！ってね」

「持ってるし。私は門ゲートの鍵の強力なやつ探してるの」

「門ゲートかあ……めずらしいね！」

新商品といえど、ほんとうにこの街は魔法には疎いらしい。新商品といっても1シーズン前のもののようなのだ。
しかしそんな街の魔法屋ルーシイは掘り出し物（？）を見つけたようだ

ホワイトドギー
「あ！白い子犬！！」

「そんなのぜんぜん強力じゃないよ？」

「いいのいいの！コレ探してたんだあ！！」

それは門の鍵のなかでも最下層とっていいレベルのものだが、今人気でなかなか手に入らない物だった。
ルーシイはそれを買うことに決めたようだ。

「おいくらかしら？」

「2万」

あつれー？よく聞こえなかったなあ？

「お・い・く・ら・か・し・ら？」

「だから2万」

あまりにも高い値段にルーシイは最終手段、最終兵器を使うことにした。

自分の自慢の胸のソレをギュームツと押し上げ、誇示するように見せつけ、色っぽい声で

「おいくらかしら？素敵なおじ様？」

魔法屋の親父は眉一つ動かさなかったそう。

「ちえー！！1000」しか負けてなかった！！私の色気は1000」かーっ！！」

憂さ晴らしに近くのカフェの看板蹴ってみた。周りを気にしないでやっちゃったから周りの人が見てる！恥ずかしっ！！

とは思いつつも後悔はしていないルーシィだったりする。

そんなことをしながら町を歩いていると前方に人だかりができているのが目に留まる。

「なにかしら？」

そう思い人だかりに近づいていく。

「この街に有名な魔導士様が来ているんですって!!」

サラマンダー
「火竜様よ——っ!!」

サラマンダー サラマンダー
火竜!?!火竜っていうと

「あ、あの店じゃ買えない魔法を操るって言う……この街にいるの!?!」

魔法に関しては目がないルーシィ。すぐさま人だかりのすぐ近くまで。

「へえーすごい人気ね……」

きつとすごい魔導士なんだろう!

そっ、期待を胸に抱き覗く……

訳ではなく

「かつこいいのかしら？」

結局は年頃の女の子のようだ。

「列車には2回も乗っちゃうし」

「ナツ、乗り物弱いもんね」

「腹は減ったし……」

「うちら金ないもんね」

二人組み（？）のグループが街を歩く。
桜色の頭をした男がナツ、隣にいる青い猫がハッピー。

「なあ、ハッピー。サラマンダー火竜ってのはイグニールのことだよなあ？」

「うん、火の竜なんてイグニール以外思い当たらないよね」

「だよな」

ナツたちは火竜を求めこの街に来ているらしい。サラマンダー

「やっと見つけた！！ちょっと元気になってきたぞ！！」

「あい！！」

イグニールというのはナツの育ての親。今はナツの元から離れてしまっていて行方不明になっている。ナツはイグニールを探しにハルジオンへ来ていた。

そして噂をすれば影、目の前には「火竜さまー！！！」と叫び声が。

「ほら！！噂をすればなんとらって！！！」

「あい！！！！」

人だかりへ目指す一人と一匹。目的は近いようだ。

ドキッドキッドキッドキッ！！

な、なんなのこのドキドキは？あたしってばどうしちゃったの？

人だかりの中に入り火竜を一目見て十秒弱、ルーシイは謎の緊張感に蝕まれていた。

ちょ、ちょっと！！あたしってばどうしちゃったのよ！？

ルーシイの方を火竜が視線を向けるだけで……

はうう！！！

謎のトキメキ。有名な魔導士だからなのか、それとも本当に……
そんな謎を頭に残しながら自分の欲望のまま火竜サラマンドラに近づいていく。

そんなところに

「イグニール！！！」

そんな声が響き、ルーシィは我に返る。

あれ？私今……！？もしかして、魔法にかけられてた！？

そして声を出した本人はというと。

「誰だオマエ」

呼んでおいて明らかに失礼なことをしていた。

「なんだアイツは？」

自分を火竜サラマンダーと言う男は自分の魔法に乗ってどっかに飛んでいった。
そしてその代わりに現れたのは

「さっきはありがとうね」

金髪の女の人だった。

- - - - -

あのあとさっきの女の人、ルーシィに「御礼をしたい」ということでナツ達は飯を食いに來ていた。
そしてその飯に誘った本人はというと

「でね？でね！？ギルドって言うのは……」

店に入ってからずっと喋りまくっていた

「ほ、ほか……」

「よくしゃべるね」

圧倒されるナツとハッピー

自分の話したいことはすべて話したようで、ルーシィは話に火と区切るをつけるところこちら（の世界）に戻ってきた。

「そついえばあんた達誰か探してたみたいけど……」

「あい、イグニール」

「サラマンダー火竜がこの街に来てるって聞いたか来て見たはいいけど別人だつたな」

「サラマンダー火竜って見た目じゃなかったんだね……」

「見た目って……人間としてどうなのよ？」

「ん？人間じゃねえよ？イグニールは本物の竜だ」

「……………！！！！？」

普通の会話から生まれる突然の真実。そこには会話についていけなくなつたルーシイの姿。
かろうじて復活して言つた言葉は

「そんなの街中にいるわけないでしょー！！！！」

全身全霊の突っ込み

ピクッと反応するナツたち

「今気づいたって顔すんなー！！」

その後もしばらくレストラン内は騒がしかった。

レストランからでたルーシイは少し休憩がてら公園のベンチに腰掛け、毎週欠かさず読んでいる週刊ソーサラーを読んでいた。

「あはははは！……やりすぎー！！」

そこには自分が入りたいギルドの特集が。しかしそこにはギルドで起こった問題ばかり。正義の味方のようなギルドがコレでは悪役に見えるといったほどの内容だ。

「魔導士ギルド、妖精の尻尾！！最高にかっこいいなあ！！」

しかし問題などルーシイに関係はない。ルーシイはただ単に妖精の尻尾に入りたかった。

そんなところに一人の男の声が

「へえ、君、妖精の尻尾に入りたいんだ」

「あ、あんた！！火竜！！^{サラマンダー}いっておくけど私に魅了^{チャーム}は効かないわよ！！」

そこにはさっき問題になった火竜^{サラマンダー}。

「いいんだ、君を今日の船上パーティに招待したくてね。君さえ来てくれればいいんだ」

「行かないわよ！！あんたみたいなえげつない男のパーティなんか！！！」

「でも、君妖精の尻尾に入りたいんだろ？」

パーティの話を断っていたのに、何を言い出すんだ、といった調子のルーシィ。しかし妖精の尻尾という言葉が出た途端に顔が変わった。

「妖精の尻尾の火竜サラマンダーって、聞いた事ない？」

「ある！！あんた妖精の尻尾の魔導士だったの！？」

「そつだよ。入りたいならマスターに話し通してあげるよ」

目の前の男にパーティへ誘われる↓その男は妖精の尻尾だった↓行くしかない！！

上のような回路が形成されるまで約0・1秒。ルーシィはさっきまでの態度とは打って変わって

「素敵なパーティになりそうね！！」

完全に男の虜に。

妖精の尻尾のことを聞き、船上パーティへ行くことにした。これから起こることも知らず、ルーシィは有頂天だった。

「はっ！……擬似魅了^{チャーム}はいつてた……！」

第1話 火竜（後書き）

いかがでしょうか？こんな感じで続けていこうかと思えます！！
誤字、脱字、感想などはバンバンお願いします！！これから改善し
ていきたいんで！！

では、よろしくお願いします！！

第2話妖精の尻尾（前書き）

無駄になげえ W W W

まあ、こんな感じにソラは絡ませていきますよ

もちろんはーとれすは登場させますし、途中から成長させます W W

↑
エ

誤字脱字、感想はどんどんお願いします!!

第2話妖精の尻尾

夜……

ふらふらするし……正直ちょっと酔いそう……酔う？あれ！？俺って変な黒いやつらに襲われて、玉に飲み込まれて……！！？
目を覚ましたソラは周りの景色を見て驚いた。自分が知らない景色、匂い。そして

「なんで船の上？」

どこか知らない船の上にいた。

ここは船尾の方のようで人は誰もいない。扉が一つあるだけだった。

「どーすっかなあ……………」

いくらなんでもどこか分からない上に、船から飛び降りるわけにも行かない。

「まあ、見つかったら事情話せばいいか」

と、いうことで中に入ることにした。

「ルーシイか……いい名前だね」

「どおも」

そこには火竜とルーシイの姿。どうやら火竜に気に入られたようでルーシイは別室に呼ばれている。
他にもパーティに呼ばれた女の子達はあるのだが、皆甲板でおしゃべり中。

ま、妖精の尻尾に入るまでこいつに愛想よくしてればいいんだけどね！

「まずはワインで乾杯といこう。口をあけてごらんゆっくりと葡萄酒の宝石がはいってくるよ」

優秀な魔導士、さらにイケメンの部類に入る火竜。そんな人に言い寄られる姿は羨まれるだろう。
しかしルーシイどっちかって言うと物事をはっきりするタイプ。簡

単に言うと、ロマンとかはあまり興味がなかったりする。だからこの状況お

うっざぁー！ー！ー！！！！

とか思っていたり。

しかし妖精の尻尾に入るため。ここは我慢、と口をあけた。

しかしルーシィは寸でのところでソレを振り払った。

「これ、睡眠薬よね。どういうこと？」

そう、このワインには睡眠薬が入っていた。

「ほっほーう。よく分かったね」

「勘違いしないで。私は妖精の尻尾に入りたいだけであんたの女になるつもりはないわ！」

しかしそうしたことが運のつき。

「しょうがない娘だなあ…素直に眠っていれば痛い目みないですんだのに」

「え？」

口元をいやらしく歪ませた火竜^{サラマンダー}。その視線の先には

「さっすが火竜^{サラマンダー}さん」

「こりゃ久々の上玉だな」

屈強な男達が。

「あんた達何!?!」

「ようこそ、奴隷船へ。他国につくまでおとなしくしていてもらうよお嬢さん」

ルーシイは騙されたことに気づいた。

「これが、妖精の尻尾の魔導士か!?!最低じゃない!?!」

そんな叫びはむなく響くだけだった。

「あれ？誰もいない」

船室内に入ったソラはつぶやいた。

そこには誰もいない空間と先に見えるカーテン。

「どうしよう？カーテンの向こうには絶対誰がいるよな……」

カーテンの先には揺れる影がある。あそこを通れば絶対に誰かに会
うだろう。

「まあ、いくしかないか。どっちにしろここがどこか知りたいし！」

と、言うことでカーテンの先に進んでみると……

「いやあああ！！」

目の前に広がるのは、なぜか男達に羽交い絞めされている女の人。
そしてそんな女の子にあつそーな棒を押し付けようとしている男。
え？どーゆーこと？……じゃない！助けなきゃ！！

ソラは自分の状況も考えず男達を止めに入った。

「おい！何やってるんだよ！」

「——！！！？ガキ！どっから入った！！！」

「ガキじゃない！ソラだ！！」

「オマエ、コレを見たからにはただじゃ帰さねえぞ？」

……あれ？これちょっとマズくない？
無計画で飛び出した自分に後悔した。

「お前ら！やっちゃまいな。ただ、顔はやめとけ？ボディ体にしとけよ？」

迫り来る男達。肉の壁ソラはコレで終わりか……と、思い、手を前に突き出し交差させる。

「うがぁー！！？」

「へ？」

なぞの叫び声に気づき前を向くと吹き飛んでいる男一人と、手に握られている鍵キブレードの剣。島でも役に立ってくれた自分の獲物。ラッキー！！ここでも使えるのか！！

獲物を手にしたソラは口元を軽く歪ませニヤリ、と笑った後、女の子を羽交い絞めになっている男達に襲い掛かった。

「ほっ！！はっ！！」

「くそ！コノガキがあ！！」

軽いフットワークで男達を倒していくソラ。そんなソラに向かっている男達は右往左往している。島で鍛えられたフットワークは役に立っているようだ。

しかし相手が相手。何人もいる男達に一人で戦うには無謀すぎる。戦力差は一目瞭然だ。

だからソラはつかまっている女の人の近くの男達だけを倒して

「お姉さん！逃げよう！！」

「わっ！！？」

女の人の手を引っ張り甲板へ飛び出した。既に離陸している船なため逃げ道は海だけだ。

「お姉さん！泳げる！？」

「泳げるけど…」

逃げようとしているソラたちに火竜サラマンダーが声をかけた

「おいおい、逃げ場はもうないぜ？それとも海に逃げるか？こいつらを放って、自分だけ？」

ここにはルーシイ以外にも何人もの人間がいる。そんな人たちを放っておけないソラたちは逃げることを断念して火竜サラマンダーのほうを向いた。

「あんた達卑怯よ！！」

「そりゃ、悪役だからな。ほら、おとなしく部屋に戻れって」

そうして火竜サラマンダーがソラたちに近づく。

戦うことは不可能、逃げることも封じられ、もうだめか…

そう思った二人

しかしそんな二人の目の前に

ズッシイン！！

救世主が現れた。

時間少しさかのぼり船上空

「ナツ、あそこだよ」

「おう……でもなあ…船の上かあ……」

「ごちゃごちゃ言わない。妖精の尻尾が確かめるんでしょ？」

「おう……ウプッ、想像しただけで酔ってきた……」

「思い出すだけで用のやめようよ。ほら、降ろすよ」

「……うし！背に腹は変えられねえ！いくぞハッピー！！」

「あい！！」

ハッピーに体を離され落下するナツ。ナツは派手な音をたてながら船の上に着地し、

酔いで甲板に突っ伏した。

「ルーシィ……と、誰？はなにやってんの？」

「ナツ、ハッピー！！？」

ルーシィが空を見上げるとそこには昼間会った二人組み

なんでこんなところに!?

「細かい話は後っばいね。いくよ、二人とも」

「「えっ?」」

ハッピーは二人を抱えて空に飛び出すと、空高く飛び上がった。

「あの女を逃がすな!! 評議員に通報されると厄介だ!!」

「へ、へい!!」

甲板からは明らかに不穏な会話。

そして銃を取り出し、こちらに撃ってきた。

「きゃあ!!」

「うわあ!!」

思わず頭を抱えるルーシィとナツ。そんなところにハッピーから声がかかる。

「ねえ二人とも」

「なによ？」

「やっぱ二人は無理」

二人を抱えたハッピーごと海に落下した。

「クソネコー！！！！」

「うっそおお！！」

ルーシィとソラの声はむなしく消え去った。

まったく、あんなのが妖精の尻尾だったなんて……っと、ソレより女の子達を助けないと…

そういつて自分の鍵を探すルーシィ。

一方ソラはどこかへ泳いでいくルーシィを傍目に、おぼれかけていたハッピーを救出した。

「大丈夫か？」

「あい」

ハッピーを救出して数十秒後、ルーシィも海から頭を出す。そして

「開け！宝瓶宮の扉！アクエリアス！！」

そう叫ぶ。すると海から瓶を持った人魚が

「すっげええええええ！！！！」

目を輝かせるソラとハッピー。

「私は星霊魔導士よ。門の鍵を使って異界の星霊達を呼べるの。さあ。アクエリアス！あなたの力で船を騎士まで押し戻して！！」

しかし星霊アクエリアスは

「ちっ」

「ちよつとお！？今『ちつ』て言つたかしらー！！！？」

どうやら関係は良好ではないようだ。

アクエリアスによって生み出された大波は、とんでもない力で船を岸に押し戻した。
ルーシイたち諸共。

「ばかあああ！！」

ルーシイの声はむなしく消え去った。

「ナツー！！だいじょ……！！」

岸に戻り再度船に入り込んだルーシイは目の前に広がるその光景に驚く。

数十人の男達がナツを取り囲むように立っていた。

「小僧……人の船に勝手に乗ってきちゃイカンだろお。あ？それにさっきのガキ、オマエもだ」

「俺っ！？」

ソラは驚きの声を上げる。しかしナツは何も返さず、黙って上着を脱いだ。

「オイ!! さっさとつまみ出せ」

「はっ!」

サラマング
火竜の指示に二人の男がナツに歩み寄る。

「いけない! ここはあたしが……!」

飛び出そうとしたルーシィをハッピーが制す。

「大丈夫、ナツも魔導士だから」

「えっ?」

ハッピーの声にルーシィは驚きの声を上げる。
ソレに対しソラは疑問の声。

「魔導士って?」

「ほら、さっき私が星霊をよんだでしょ？そういうことができる人たち……ってあんたなんで知らないの！？常識でしょ！？」

「いやぁ……あはは、まあ、後で話すよ」

話すと長くなりそうなので後で話すことにした。

「お前が妖精の尻尾の魔導士か？」

「それがどうした！？」

「よくツラ見せろ」

二人の男がゆっくりナツに近づく。そして顔を一瞥したナツは二人の男を纏めて殴り飛ばす。

「オレは妖精の尻尾のナツだ！！！！オメエなんか見たことねえ！！！！」

「なっ！！！！？」

「え？妖精の尻尾！！？ナツが妖精の尻尾の魔導士！！？」

ルーシイも驚愕する。しかしナツの肩には自分が大好きな紋章、妖精の尻尾のシンボルが。

「な……！あの紋章！」

「本物だぜボラさん！！」

「バ……バカ！その名で呼ぶな！！」

サラマンドー
火竜……もといボラがうるたえる。

「ボラ……紅天のボラ。数年前『巨人の鼻』^{プロミネンス}って言う魔導士ギルドから追放されたヤツだね」
^{タイタンノーズ}

「あ、知ってる！！魔法で盗みを繰り返してて追放されたって言う魔導士！！」

ルーシイも知っているようだ。
ソラは何のことか分からなかったが

「とにかく、悪者ってことだな!!」

「そう!」

悪者ということは理解したようだ。

「オメエが悪党だろうが善人だろうが知った事じゃねえが、妖精の尻尾を語るのには許さねえ」

「ええいつ!!ゴチャゴチャうるせえガキだ!!!!」

ボラは得意の魔法、日の魔法をナツに放つ。
ボラが放った炎に包まれるナツ。

「ナツ!!」

「危ない!!!」

助けに入ろうとするソラとルーシィ。しかしソレをもハッピーは制した。

「ナツに火は効かないよ」

目の前には

「まずい。こんなにまずい炎は初めてだ。オマエ本当に火の魔導士

か？」

ボラの放った火を『食べる』ナツの姿。

「「「「「はあ！！？」」「」「」」」」

ハッピーを除く他全員の驚きの声。

「ふー…ごちそう様でした」

「な…なな…何だコイツはー！！？」

「火…！！？火を食ったと！！？」

火を食べたナツは、口元を歪めると

「食ったら力が湧いてきた！！つくぞおお！！！」

ボラたちに襲い掛かった。

「ボラさん！オレあコイツ見た事あるぞ！！！」

「はあ！！？」

「桜色の髪に鱗みてえなマフラー…間違いないエ!!!コイツが…本物の……」

ドゴオオオオオオン!!!!!!

そこから先は言う事は出来なかった。理由は簡単。ナツの炎に吹き飛ばされたからだ。

サラマンダー
「火竜……」

ボラの部下の言葉を受け継ぐように続けるルーシィ。
ナツはというと…

「よく覚えとけよ。これが妖精の尻尾の……」

拳に炎を纏い、ボラに向かって全力で……

「魔導士だ!!!!!!」

殴りつけた。

ボラは吹き飛び、船外へ。

ナツもそれを追いかけて、他のやつらをもぶつ飛ばす。

「オララララアアー！」

すごい…すごいけど……

「やりすぎだぁー！！（よぉー！！）」

大暴れするのを見て泣叫ぶ（？）ソラとルーシィ。

「あいー！」

元気に答えるハッピー

「『あいー！』じゃないわよ！！ほら！！軍隊！！」

騒ぎを聞きつけた地方の警備隊が港へやってきた。

「こ、この騒ぎは何事かねー！！！！」

その言葉を聞いてか、一暴れして返ってきたナツは

「やべー!!逃げんぞー!!」

ルーシイの手を持って走り出す。

「なんであたしまでえー!!!?」

「だってオレたちのギルドに入りてえんだろ?」

「っ……!!」

「来いよ」

ナツがルーシイに笑いかける

「うん!!!!」

ルーシイは元気よく返事をして、ナツの後を追いかけた。

「あ、待ってよ!!俺も行くって!!」

ソラもそんなナツを追いかける

が、

「おめーは、誰だああ！！！」

「ふーっ！？」

ナツによって殴られ意識消沈。

「ちょっとーっ！！！！この人は私を助けてくれた恩人なんだからーっ！！！」

「え？」

急いで気を失ったソラを担いで全員逃げ出した。

逃げる二人と一匹の顔はなんともいえない微妙な顔だったという。

第2話妖精の尻尾（後書き）

うん。長い割りに内容がない。

まだ漫画1話分ですよ……終わるのかな？コレww

第3話ギルド（前書き）

まあ、序盤って事もあってそこまで進展はないです。

もうそろそろオリジナルストーリーリー入れていこうかなあっておもってます。

第3話ギルド

「ただいまー！！！！！！！！」

「ただー」

「うわぁ、おつきーい！！」

「えっと…こんちは！！」

三者三様全員異なるあいさつをして妖精の尻尾へ。

「あ、ナツ、ハッピー！おかえりなさい！」

「おう、ナツ！お前ハルジオンではまたやらかしてって……うごうご
！！？」

「てんめえ！サラマンダー火竜の情報嘘じゃねえか！！！！」

「あらあら、ナツが帰ってくると早速お店が壊れそうね」

「もう壊れてるよ！！？」

ワイワイがやがや……

「私、本当に妖精の尻尾に来たんだあ……」

ルーシィはあまりのことに感激中。

ソラは

「騒がしいところだな……」

……ある意味感激中？のようだ。

第三話ギルド

えーっと……どーゆうことだ？

目の前に繰り広げられているのは妖精の尻尾のほぼ全メンバー参加の大乱闘。

こうなった理由は……なんでだろ？ここってギルド？だよな？仲間じゃないの？

「ナツが帰ってきたってえ！？」

ナツと一緒にギルド内入って約5分後、ギルドの奥のほうからやかましい足音が聞こえたと思うとそこには……

「てめえ、この間の決着つけんぞコラ！！」
パンツ一丁の男

「あんななんて格好してんのよ。これだから品の無い男は……」

そんな男を止めに入った人は……

「いやだわ」

大きい樽ごと酒をラッパ飲みする女

「くだらん！昼からピーピー騒ぐんじゃない」

背中に『一番』と書かれた学ランのようなものを着た

「男なら拳で語れ！！！」

喧嘩馬鹿（しかも速攻玉砕）

「騒々しいな……まったく……」

ホスト崩れのようなイケメン。ルーシィによると彼氏にしたい魔導士上位ランカー。周囲には大人のお姉さん。

「混ぜてくるねー!!」

結局喧嘩馬鹿（わりと強い）

……………なにごと。

ココにはまともな奴がないのか!!というレベルの異常な面子。
唯一まともな人といえは……

「あらあ？新入りさんたち？」

このギルドの看板娘にして、総長補佐的な立場にいる女、ミラジェ
ーン

「うつそお？本物！？本物のミラジェーン!？」

ルーシイが慌てるほどの有名人のようだ。

「……………っじゃない！あれ、止めなくていいんですか？」

しかし結局

「いいのよ、いつもの事だから♪」

「あららら……」

やはり妖精の尻尾のメンバーのようだ。
止めに入らず傍観。
すぐ横ではなぜか激化している身内喧嘩。しかも激化はとまらず……

「あんたら……いい加減にしなさいよ！……！」

「あつたまキター！！」

「ぬおおおおお！！」

「困った奴らだ」

「かかって来い！！」

魔法を使い始める始末。

ちよつとお！？コレなんかまずくない？

「ル、ルーシイ！！？」

「魔法！！！？たかが喧嘩に！？」

「ちよつとコレはまずいわね」

喧嘩ごときに魔法を使うなんて……

とはいいつつもソラは魔法をよく知らないのだが、ナツの滅竜魔法、ルーシイの星霊魔法を見ているのでなんとなくではあるが危険性は理解していた。

ギルドメンバーのミラジェーンさえ焦るのだから相当ヤバイようだ。このままじゃこの建物自体が消失するんじゃない？というレベル。一緒にいるだけで肌がピリピリしてくる。

しかしその魔法は使われることはなく静かに、収まる。ピリピリしていたものも消え去った。

「やめんかあ！！馬鹿たれえええ！！！」

「でか——っ！！！」

ソラとルーシイが声を合わせて驚くほどの巨人。
その姿を見たギルドメンバーは全員停止した。ただ一人、ナツを除いて。

「あら、いたんですか？マスター」

「マスター！！？」

ミラジェーンの言葉に再び驚くルーシイとソラ
マスターってことはココのトップ！！？

「お前らびびりやがって！！この勝負、俺の勝ち！！」

マスターはソラを（遠慮なく）踏み潰すと、こちらのほうを向いた。

「む、新入りかね？」

「は、はい……っ……！！！？！？」

出てきたのは虫の声。。

「ふんぬう!!!!」

「……っ……!!!!?!!?」

マスターが出す声に言葉を失った二人がびくびくしながら成り行きを見守る。否、見ざる得なくなる。正直言つと体が動かない。姿が変わっていくマスターは……

「よろしくね」

縮みに縮んでソラの腰ほどの高さの爺さんになった。

「……っ……!!!!?!!?」

二人は再び言葉を失った。

「とう!!!!」

マスターは某ヒーローのように掛け声を放ち、連続後方宙返り。

「んがつ!?!」

結局着地失敗。

「……っ……」

誰もが笑いをこらえたのは言うまでもない。

ハッピーは……過呼吸起こしてる……？やばいよ……！……あ、ミラに助けられた。

「まーたやってくれたのう、お前ら。見よ、評議会から送られてきたこの文書の束を」

なんだ！？あの紙束……！評議会？なんだろう？

（なあ、ルーシィ、評議会って？）

（魔導士ギルドを束ねる機関よ。ギルドがやってることを見張ってるの）

（へえ……）

うん。よくわかんね。まずギルドって何なんだろう？あとでルーシィに聞いてみよう。

「まずはグレイ」

「あ？」

あ、さっきの変態

「密輸組織を検挙させたまでにはいいが……その後街を素っ裸でふらつき……」

……なんで脱いだ。

「干してある下着を盗み逃走」

「だって裸はまずいだろ……」

いや、まず脱くなよ。

「つぎにエルフマン！！っ貴様は要人護衛の任務中、要人に暴行」

さすが喧嘩馬鹿。保護する意味。それじゃ保護の意味無いじゃん

「カナ・アルベローナ。経費と偽って某酒場で飲むこと15樽しかも請求先が評議会」

「ばれたか」

おお、さっきの樽女。評議会ってギルドってののトップだよな！？
何やってんの！？

「次にロキ……評議員レイジ老子の孫娘に手を出す。某タレント事務所からも損害賠償の請求が来ておる」

あ、さっきのホスト！あんなに女の人いるのにまだいたのか…

「最後にナツ」

あ、ナツだ

「デボン盗賊一家壊滅するも民家7軒も壊滅。チューリイ村の歴史ある時計台倒壊、フリージア教会全焼、ルピナス城一部損害、ナズナ溪谷観測所崩壊により再起不能、ハルジオン港半壊……」

すげえ、ナツだけ異常だ。ナツ危ない。俺もこれから気をつけよう。そつえば気づいたけど、やっぱりココは俺が知らない世界みたいだな。聞いたこと無い場所ばかりだ。

「他にもアルザック、レビィ、クロフ、リーダス、ウォーレン、ビスカ……」

さつき喧嘩をしていた面子が全員ビクツとなる。

……ココの人全員問題起してるのか！！？

「貴様らあ……」

マスターが再び口を開いた。

周囲の気温が一気に下がった感じだ。ゾワリ、背筋が凍る。

「わしは評議員に怒られてばかりじゃぞお……」

……すごい威圧感だ。

なるほど、こんなに小さい爺さんがココのトップなわけだ。貴禄つていうのかな？よく分からないけど……うん。みんなの親父って感じ？

「だが……評議員などクソ喰らえじゃ」

え？

マスターは評議員からの始末書を燃やしてしまった

「理を超える力はすべての理のより生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の中の”気”の流れと自然界に流れる”気”の波長があわさり、初めて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力をつかう。いや、己の魂すべてを注ぎ込むことが魔法なのじゃ」

魔法のことが分からないソラだが、この言葉はじっくり聞いていた。理解できたわけじゃない。ただ、感じた。魔法が何なのか、体で感じている。

「上から覗いてる目ン玉気にしてたら魔道は進めん。評議員の馬鹿どもを恐れるな！！！」

「自分の信じた道を進めい！！それが妖精の尻尾の魔導士じゃあ！！！！」

ウウオオオオオー！！！！

建物内に歓声が響く。もちろんソラの声も混じっている。ルーシイの声も。

本当にさっき喧嘩をしていたのか！！
そう思えるほどの仲のよさ。

笑い声は夜遅くまで続いたという。

「え？じゃあソラって違う世界から来たってこと！？」

「まあ、そういうことになるのかな？」

「すごい、物語みたいね………だけど大変じゃない？この世界のこと
はよく分からないんでしょ？」

「おう！でも、なんとかやっていけそうな気がするよ！！」

夜

ソラはルーシィとミラ、あとその他モブの皆さんに自分のいきさつ
を話していた。

ルーシィとも前に話したが、この世界に自分がいた島『デイスティ
ニーアイランド』はないようだ。つまり本格的に分からない場所に
着いたということだ。

「でも衣食住はどうするのよ？このままじゃ泊まる場所も無いわよ
？」

「俺、野宿はなれてるから平気！！」

「野宿って………あ、ナツのところに泊めてもらえば？」

「え？いや、ソレは悪いって」

と、ここでナツがやってきた。

「俺の家？別に来てもいいぞ？俺とハッピーしかいねえからな！な、ハッピー！！」

「あい！」

簡単に承諾したナツと、元気よく返事をするハッピー

「ほんとか！！？」

「おう！」

「あい！！」

「やったねソラ！」

「ルーシィのおかげだって！よろしくな！ナツ！」

と、言うことではらくの間ナツの家でお世話になることに。当面の間はお世話になりそうだなあ……。

「そうだ！ソラもギルド入っちまえよ！！」

「え！？いや、でも！俺いつかなくなるかもしれないし！！」

「ならソレまでの間だ！！お前の魔法すげえらしいしな！一回勝負して見たいし。それにギルドは家族だからな、寂しい思いしなくてすむぞぉー！！」

家族、ねえ。思えば母さんにも会えないんだよな……。それに俺の魔法……。あれって魔法なのかな？そのことも気になるし。入ってみるのもいいかもしれない。あ、あと勝負は遠慮願いたいなあ……。ソラはしばらくうつむき、考える。そして

「……そうだな、せつかく違う世界に来たんだし、楽しむのも悪くないよな！」

「あい！！」

「よし！おれも妖精の尻尾に入るぞ！！」

「よっしゃあ！！」

そうしてこの日、ソラは妖精の尻尾の一員になった。

翌日

ソラがナツの寝相の悪さに部屋を出て行ったのは言うまでもない。
その事を泣く泣く話すソラの顔は、真っ赤に膨れていたという。
(ルーシー談)

第3話ギルド（後書き）

次回！！

マカオ救出からのあいつ出現。あの変態！！

第4話魔法（前書き）

すみません。マカオ救出まだでした。ってか思った以上に魔法の説
明が長かったです。

あと自己解釈大きく持ってます！まあ、ご了承ください！では、ど
うぞ！

第4話魔法

それは妖精の尻尾の朝

「なあ、結局のところ、魔導士ってなんなんだ？」

「ああ、そっか、ソラは魔導士も分らないんだっけ」

ソラも、今日から魔導士だ。

第四話魔法

「えーっと、まず私たちのことから説明するわね。私達のように魔法を使える人、または魔法を使ってソレを仕事としてる人のことを『魔導士』っていうの」

「ふむふむ」

「魔導士たちが使う魔法は人それぞれ。たとえばルーシイの魔法は星霊魔法だから店で買えたりもするわね。あとハッピーみたいな魔法は能力系^{アビリティ}。先天性の魔法よ。たまに後天的な人もいるけど」

「……なるほど」

ミラの分かりやすい説明。もっとも、ソラにはほとんど理解できていない。

じゃあ、俺の魔法は何なんだろう？

「あ、だったら俺の魔法は何なんだ？店で売ってそうでもないし、別に昔から持ってるわけでもないぞ？」

「そうね。ソラの場合、珍しい古代の魔法^{エンシェント・スベル}っていう魔法ね」

「エンシェント・スベル 古代の魔法ウ？」

「そう。ソラの『キープレード』はナツとかと一緒に。ナツも『滅竜魔法』エンシェント・スベル っていう古代の魔法を使うの。でもこの魔法は本当に珍しいからどんな能力か、どんな力かは誰もわからない。ナツみたいに教えてもらったりしてれば分かるだろうけど、ソラみたいに急に使えるようになった人は自分で開発していくしかないわね」

「そっか……」

うーん…自分の力ぐらいは把握しておかないといけないなあ……。制御できないは危ないしな。

「じゃ、今度はギルドについて説明していくわね。リーダーズ、光ペーン貸して」

「うい」

ミラが次々と”空”に文字を書いていく。

すごい。あれも魔法なのかな？えっと…政府、魔法評議院、地方ギルド、ギルド……力関係かな？

「まず、魔法界で一番えらいのが、政府と繋がりがある評議会……魔法評議院ね。魔法評議員は10人魔いて、法界におけるすべての秩序を守るために存在するの。犯罪を起こした魔導士に裁くのもこ

の機関ね」

あ、昨日ルーシイが言っていたことだ。

巨人の鼻にいたボラもここに裁かれたのだろう。

「その下にいるのがギルドマスター。うちのマスターとかよ。マスターは評議会での決定事項を通達したり、各地方ギルド同士の意志を伝え合ったりして、私達を円滑にまとめてくれたり……まあ、大変なお仕事よね」

へえ……マスターもがんばってるんだな。

と、ここで気づく。コレってマスターの説明……

「結局ギルドってなんなの？」

「うん。ギルドって言うのがその魔導士達が所属する場所。魔導士たちはそこで仕事をもらうのよ。簡単に言えば仕事の仲介所ね」

「ギルドでしか仕事はもらえないのか？」

「もちろん、フリーで働いている人もいるけど、その人はよっぽど情報力に長けていて、実力がある自信家ね。ギルドのいい点は情報が集まることと、信用されやすいから報酬がいいこと。あとは簡単にパーティを組めるから難しい依頼もこなせることかしら」

「……なるほど」

そっか。ギルドにいれば仲間と一緒に行けるんだな。しばらくは一人じゃ無理だし、誰かと一緒に行くのもいいかも。頭の中でこれからの算段を建てていくソラ

「！って、俺まだ仲間いないじゃん！」

がつくし、とうな垂れるソラ。まだ入ったばかり+この世界のことよく分からないというハンデで誰と一緒に仕事へ行ってくれるか…。

しかしそこに救いの声

「あ、ならあたしと組もう？ソラ。あたしもまだ入ったばかりだし、それに一人じゃ心細いから」

「ほんとかルーシィ！！」

やった！と喜ぶソラ。これでどんな仕事もいける（気がする）な！！そんなソラの横ではミラがまた何かを書いていた。

「ミラは何かいてるの？」

「みてわからない？」

ええーっと、丸い物体に生える何か……
これは……！！

「……ジャガイモ？」

ああ！ミラが泣いちゃった！！！！

「ソラあ……女の子を泣かせるなんてえ」

ルーシイのニヤニヤした悪そうな顔。腹立つなあ……

「じゃあルーシイはコレ何か分かるのか！？」

「え？……ええっと……山芋？」

「そんな変わらないじゃん！！」

後でミラに聞いたところ、ギルドメンバーの似顔絵だったようだ。
少々居心地が悪くなったソラは、視線を明後日の方向に向けた。そ

ここにはテーブルでギルドメンバー達と話しているナツの姿が。

「なあナツ、お前あんなかわいい子どこで見つけて来たんだよお」

「俺のチーム入ってくんねえかなあ……」

下心たつぷりの男達。こんななりでも実力があるから憎めなかったりする。

一方ナツは

「どこ行くんだナツ？」

「仕事だよ。金ねーし」

まじめに働こうとしていた。

「報酬がいい奴にしようね」

「おう！……コレなんかどうだ？」

ナツが手に取ったのは盗賊退治の依頼書。報酬は「16万」と悪くない仕事だ。

そんなナツの程近いところでは、マスターと子供が何かを言い合っていた。このギルドのメンバーの息子、ロメオだ。

離れたところで聞いていたのだがは話の内容はよく聞こえた。

どうやらロメオの親父、マカオが任務に行ったきり帰ってこないそうだ。それも3日。心配になったロメオだったのだが、マスターはそれを追いつ返してしまった。

「マスター、厳しいんだな」

「マスターも心配なのよ」

ふうん……と一息つくソラ。するとナツのいるほうから

ズドン!!

重い音が響いた。

その原因、ナツは荷物を持ってさっさとどこかへ行ってしまった。その後姿は、何か急いでおり、イラついているようでもあった。

「どうしちゃったの？アイツ？」

「な。ナツ、大丈夫かなあ……」

心配するソラとルーシィ。

そんなナツのことをミラが話し出す。

「ナツもね、ロメオ君と一緒にだから。自分とダブっちゃったのかな」

「え？」

「ナツのお父さんもね、出て行ったきり帰ってこないのよ。お父さんって行っても育ての親だけどね……しかも、ドラゴン」

「「ドラゴン！！？」」

「小さいころドラゴンに森で拾われて、言葉や、文化や、魔法なんかも教えてもらったんだって。でも、ある日そのドラゴンは姿を消した」

「そっか……」

ソラとルーシィの顔が若干暗くなった。

ミラは再び言葉を紡いで行く

「私達、妖精の尻尾のメンバーはみんな何かを抱えているの。傷や、痛みや、苦しみや……私も」

「え？」

最後の声は聞こえなかったが、顔は切ないものだった。

「うっん、なんでもない」

再び笑顔に戻るミラ。

しかし、どこか無理をしているようなところもあった。

その言葉を聞き、ソラとルーシィは顔を合わせ、ひとつ、決心をした。

「でね？でね？あたし今度ミラさんのところに遊びに行くことになったの」

「下着とか盗んじやだめだよ」

ここはナツたちが乗る馬車の中。

「ってかなんでルーシィたちがいるの？」

「何よ？何か文句ある？」

「そりゃあもう、いろいろと……あい」

本来ナツとハッピーだけだったのだが、ソラたちもそれに乗ってついていくことにしたのだ。

「だってせつかくだから妖精の尻尾の役に立つことをしたいなあーと」

その顔は明らかに何かたくらんだような顔。
その顔を見て全員思ったことだろう。

（（絶対株上げる気だ！！））

一方ソラは若干ルーシィに引きながら

「あ、俺はまだ仕事とかいったことないから着いていこうって思っただけ」

とだけ言っで置いた。

正直にナツのことが心配でって言えばいいのに、って思ったのは秘密だ。

「それにしても本当にあんたって乗り物だね。いろいろかわいそう」

「あ？」

ナツはというとさっきから酔いでダウン状態。こんな様子で大丈夫なのか、と思うほどだ。

「そういえば、マカオさん探すの終わったら私すむところ探さないとなあ」

「オイラとナツんのところに住んでもいいよ」

「本気で言ってたらヒゲ引っこ抜くわよ猫ちゃん。ソラがあんな顔で帰って来たんだからいやよ」

あはは、そう談笑しているうちに馬車は止まった。

「止まった!!」

止まった瞬間に復活するナツ

「着いたのかしら?」

そついいながらドアを開けたルーシィ。

「すみませんお客さん。コレ以上は……無理です」

その視界の先で広がるのは

吹雪

「ナニこれ!山のほうとはいえ夏季なんじゃないの!?!」

馬車が降りる面々

「「寒っ！！」」

思わず叫ぶソラとルーシ

「当たり前だろ？そんな薄着じゃ」

「あんたも一緒じゃない！！」

こんな場所が初仕事かあ……これ無理な気がしてきた……
ソラがそう思ったのは当然のことかもしれない。

「……うっ、寒い」

ルーシはそういいながらナツの布団を体に巻きつけ

「ひひひ開け、時計座の扉ホログウム！」

と叫ぶ。そこにいたのは

大きな時計

「おお！！時計だ！！」

そしてルーシィはその時計に入ると

「あたしここにいる」と申しております」

幸せそうな顔で中に座り込んだ。

「あ！ずるいぞ！！自分だけ！」

「何しにきたんだよ」

ナツのナイス突っ込み。

そういえば、とソラが一つナツに聞いた

「何しにきたといえばマカオさんはここに何しにきたんだ？」

「しらねえでついて来たのか？凶悪モンスターバルカンの討伐だ」

バルカン？と首をかしげるソラ。一方ルーシィは驚いたような、な
んともいえない顔（ホロログウムの中）で

「あたし帰りたい」と申しております」

「はいどうぞ、と申しております」

ソラがルーシィと組むのやめようかな、と思った瞬間だった。
まだ、コンビ結成3時間だった。

「マカオーー！！どこだー！！バルカンにやられちゃったかあー！！」

「マカオさーん！！」

山を探索し始めて15分ほど。バルカンは見る影もなく、マカオの
姿も見つからない。

すると山の上部のほうから雪塊の崩れる音が！

「危ない！！」

全員が四方によける。

その中心にいたのは白い毛皮のサルのような生物、バルカンが

「バルカンだー!!」

ナツはバルカンの目の前で対峙するように立つたが

「うほっ!!」

バルカンはソレを無視。ナツを飛び越え

「人間の女だ」

ホログラムに入るルーシイの元へ。そして

「うほっ」

ホログラムごと担いでどこかへ走っていく。
って!まずくないか!?コレ!!

「ナツ!!」

「分かってる。あいつ、しゃべれんのか。行くぞソラ!ハッピー」

「あいさ!!」

「お、おう!!」

すぐにバルカンのあとを追った。
その先で

「ってか助けなさいよう!!」と、
申ししております」と聞こえた
気がする。

第4話魔法（後書き）

次こそマカオの救出を！！

次は初銭戦闘に入りますね…大丈夫かなあ…

あ、あとやっぱり最初に登場するやつらは黒いアレですよ！（笑）

次回をお楽しみに！！

感想待ってます（笑）

第5話力と仲間（前書き）

うん。KHサイドの敵は次の仕事かなあ…エルバー…ハートレス使えるのかなあ？ww

第5話力と仲間

あたしの名前はルーシー！17歳の星霊魔導士よ。

あるま街でソラって言う少年とナツと猫（？）に会って憧れの魔導士ギルド、妖精に入ることができたの。

ギルドに入ってすぐ、妖精の尻尾の魔導士の一人が仕事から戻らないって聞いたナツが吹雪の山、ハコベに助けに行ったのね。私は興味本位……うん。別に心配なわけじゃない。興味本位でナツについて行っただけど……

「「なんでこんなことになってるのー！！」と、申されましても！！」

なぜかサル達に囲まれています。

第五話仲間と力

「ルーシィ、どこ連れて行かれたんだ？」

「さあなあ……この吹雪じゃ、視界も悪いし……ん？この匂い！！
急に出てきた！！」

「分かったのか！？」

「おう！行くぞ！！」

「おう！「あい！」」

ルーシィが連れ去られてから大体3分ぐらい。ただでさえ視界が悪い吹雪の中白いサルを見つけるのは至難の業だった。なんとかナツが見つけたみたいでそこに向かってます。

「なあ？バルカンってどんなモンスターなんだ？だだのサル？」

ナツ達とはかくソラは何も知らない。この状況で戦ったりするのは困難を極めるだろう。

そんな質問に答えてくれたのはハッピーだった。

「バルカンはね……」

「バルカンは？」

「最近では珍しい白いサルです!!」

「つまり何も分らないわけだな」

「こんなんで大丈夫なのかなあ……お！ナツがとまってる。着いたのかな？」

ナツは山の中腹にできた少々大きい洞穴の前で止まっていた。ナツの元へ向かい中を覗き込むと……

「ウホ！ウホ！ウホ！ウホ！」

ルーシイの周りを回るサル達。

「助けてえ……」

涙目のルーシイ。

「まったく！やっと追いついたぞ！！マカオは……」

ルーシイの元へ、性格にはバルカンの元へ走っていくナツ

「どこだああああ！うべ！！」

しかし出落ちといふかなんと言つか。足元にあった氷に気づかず転んでしまった。

しかし流石はナツ。この程度じゃなんともない。普通の人間なら既にグロッキーだろう。岩破壊してるし。

「おい！猿！マカオはどこだ！！言葉分かるんだろ！！人間の男だ！！」

「ウホ？男？」

「そーだ！！」

どうやらバルカンは人間の言葉を十分に理解できるようだ。

「マカオをどこに隠した！！」

指を刺し、言い放つナツ

「うわ！隠したって決めつけた！！」

その言葉に突っ込むルーシィ。

「ウホホ？」

しかしつつこんだ後にルーシィは気づく。

” マカオは生きているのか？ ”

もう3日も帰って来ていないのだ。可能性としてはありえる。なんとしても避けたい状況ではあるが、怪我して動けない、というのは間違いないだろう。

しかし、バルカンはナツを指で呼び寄せると、

「こつちか？」

ドガッ！！

ナツを山から蹴り落としたのだった。

「おで、男嫌い。女好き」

「「ナツ！！！」」

ソラとルーシィの声が響き渡る。

「だ、大丈夫だよな？」

「た、たぶん……ったく！ナツが無事じゃなかったらどうしてくれるのよ！！行くわよ、ソラ！」

「おう！」

ナツの仇？をとるため二人はバルカンに襲い掛かる。
ルーシイは自分の鍵に手を伸ばし、叫ぶ。

「開け！金牛宮の扉！！タウロス！！！」

「MOオーーー」

「「牛！！？」」

今度はバルカンとソラの声が合さる。
二人？は顔を見合わせると

「うお！！！」

「ウホ！？」

同時に攻撃を再開した。
一方ルーシイのほうでは……

「M o o … ルーシィさん今日も相変わらずいい乳してますなあ!!」

「ああ、そういえばこいつもエロだった」

ああ、なんでこう、まじめな奴がいないのかしら？と自分の魔法に疑問を持っている。

ソレを見ていたバルカンは、牛とルーシィに嫉妬…？したのか

「おでの女取るな」

いきなり爆弾発言

ソレに対しタウロスも、

「俺の女？俺の乳と言ってもらおう!!」

「言ってほしくないわよ!!」

爆弾発言

ソレを聞いて真に受けたソラ。

「え！？ルーシィって牛の……!?!」

「ちょっと！あんたまで勘違いしないで!!」

「なんだつまらない」

「つまらないってなによ!!!!」

なんとも緊張感のない空気になってしまった。
そんなところに来たのは

「よくも落としてくれたなあ」

「ナツ!!」

落とされたしまったナツ。ナツは再度洞穴に入り、

「一匹増えてんじゃねーか!!」

タウロス《……》を殴り飛ばした。

「M o う、だめっばいすな……」

タウロス一発KO。

「ちよつとお!!こいつは味方よお!!」

ルーシイの叫びもむなしく、あっさりタウロスは倒れた。

ああ、もうあたし戦力外じゃない……嘆くルーシイ。基本的に星霊魔導士は1体しか星霊を呼ぶことはできない。さらに呼んだり戻したりするには星霊と魔導士の相互承諾が必要だ。なのでタウロスがこっちに召還されている状態ではルーシイは他の星霊を呼ぶことができないのだ。

「ってか、ナツはどうやって助かったんだ？」

「ん？ハッピーのおかげさ。ありがとな」

「あい！」

ハッピーには翼^{キヲ}という魔法があるので飛ぶことができる。しかし重量には限界があるので1回に1人が限界だ。ソラとルーシイは身をもって知っている。

そんな状況を見て、いつの間にか復活していたルーシイは

「あんたって乗り物ダメなのにハッピーは平気なのね」

と。

そしてそれを聞いた全員に

「おまえ、何言ってるんだよ……ハッピーは仲間だろ」

「ルーシイ、今のはひどいぞ！」

「おいら、もう立ち直れない……！」

全力で引かれていた。

「ウホ！！！」

完全に無視されて怒ったのか、バルカンは全力でこちらに走ってきた。

「なあ。ルーシィ、いいか？妖精の尻尾のメンバーは全員仲間だ」

ナツはそれに気づいているのか、気づいていないのか、話を続ける。

「じっちゃんも、ミラも」

「ナツ！後ろ！！」

さすがに危ないと判断したのか、ルーシィが叫ぶ。

「うぜえ奴らだが 그레이 や エルフマン も」

「わかった！わかったから後ろ向いて！！」

もう、バルカンとの距離は攻撃圏内だ。

このままでは危ない！！

そう思って飛び出そうとしたソラだったが、ナツの顔を見て、やめた。

その顔は何か満ち溢れていて、安心できる顔だ。

「ハッピーもルーシィも、ソラも、みんな仲間だ」

「だから！俺はマカオをつれてかえるんだ！！！」

完全に死角から襲い掛かってきていたバルカンを吹き飛ばし、

「早くマカオの場所いわねえと黒焦げになるぞ？」

挑発した。

その言葉を聞いて、ルーシイは実感した。

ナツは本当に、誰よりも妖精このギルドの尻尾を大事にしているんだと。

ナツとバルカンの戦いをソラは部屋の端っこで見ていた。
素直な感想は

すごいな

だった。

ソラはまだ誰かのために、あそこまで戦ったことはない。

だからナツの戦い方には

「憧れるなあ……」

「いつくぞー……」

バルカンの怒涛の攻撃を意図も簡単に防ぎ、よけて、カウンターを入れて、ナツは最後の締めにかかろうとしていた。

「火竜の鉄拳!!」

火を纏った拳をバルカンに打ちつけ、バルカンにKOさせてしまった。

「ねえ、マカオさんの場所聞くんじゃなかったの？」

「おわ! そうだった!」

「完全に気絶しちゃってるな」

バルカンは完全に気を失っている。マカオへの情報源は完全に消え

てしまった。バルカンが目を覚ますまで待たなくてはならない。それがいつになるか……

そう、思った瞬間

ミミミミミミ……

バルカンの体が光り始めた。

「な、何だあ！？」

全員がバルカンのほうを向く。とそこには

「猿がマカオになった！！！」

「「ええ！！？」」

なんとバルカンがマカオの姿に変形したのだ。

「テイクオーバー
接收だ！！」

「テイクオーバー
接收？」

「体をのつとる魔法だよ！！」

そんなものもあるのか！そう、思った矢先、

グラッと、マカオの体が揺れ、

「わああああ!!」

洞穴の外へと落ちようとしていた。

ナツがマカオの足をつかみ、ハッピーがそのナツを支える。

「二人は無理だよー!!」

しかしハッピーに二人も持ち上げる力はない

「あきらめんな!!」

そこに食いついたのはソラとルーシィ。

しかし、女一人と14歳の子供。大人の体重二人分を持ち上げることなどできない

「もっ……無理……!!」

全員の体が落ちる!そう思った瞬間

「M O オ大丈夫ですぞ」

復活したタウロスによって救出された。

「出欠がひどい！！応急セットじゃ間に合わない！！」

「テイクオーバー 接收される前に相当争ったみたいだね」

「わき腹の傷が……」

「マカオ！しっかりしろよ！！」

全員によって引き上げられたマカオの傷は相当のものだった。体中は傷だらけ、寒い中にいたせいで体も冷えている。これでは本格的に危ない。

「くっそ……どうする！！」

悩む全員。

そしてナツが無言で

火のついた手をわき腹に押し付けた

「グワアアアアア!!」

あまりの痛さにうめくマカオ

「ちょっと何やって……」

ルーシイはそこまで言って気づく。この方法なら止血になると。

「死ぬんじゃない!! ロメオがまってるんだろ!!」

ナツの言葉か、それとも痛さによって目を覚ましたのか。マカオが
ゆっくり話し出した。

「くそ、情けねえな…… 19匹は、倒し…… たんだ。最後の1匹に接
オパー収されて……」

「馬鹿やろう! しゃべるんじゃない!! 傷口が開くだろ!!」

19匹!!?

ソラとルーシイはその言葉を聞いて、絶句する。

魔導士の仕事をなめていた、と。

楽しくやれるものだと思っていた。しかしそんなことは間違いだった。もちろん楽しくできるだろうが、それ以前に『命』がかかっている。命がなくなればその楽しさも味わえないのだ。

二人は今日のことを決して忘れないと決意した。

町に戻ると、街の入り口には少年、ロメオの姿が。

「父ちゃん、ごめん」

そもそもこうなったのはロメオの責任でもあった。

マカオが一人で無茶な仕事へ出たのは、街の子供達に妖精の尻尾のことを馬鹿にされたロメオが腹を立てて

「父ちゃんすっごい仕事いつてきてよ！おれ、このままじゃ悔しいよ！...」

といったのが原因だったのだ。

「心配かけたな...」

しかしそんなロメオを咎めもせず、マカオはロメオに抱きついた
そしてニカッと笑うと

「今度、クソガキ共に言われたらいつてやれ。お前の父ちゃんは怪物19匹倒せるのかつてなよ!!」

そうだったのだ。

無言で立ち去ろうとするナツたちにロメオは

「ありがとー!!ナツ兄!!ハッピー!!」

「それと、ルーシィ姉とソラ兄も!!」

そう叫んだのだった。

「そういえば、ナツはあの吹雪の中どうやってルーシィの場所分かったんだ?」

「ん？おいがしたんだよ」

「どんな？」

「ルーシィの脇の匂い」

「……………」。

その後ナツはルーシィとお話したそうだ。

第5話力と仲間（後書き）

オチすみません。

今回はソラの気持ちに重点を置いてみました（笑）

まあ、こんな感じになっちゃいますね。結局ソラの戦闘なかったw
本当はここでハートレス出そうと思ったけど……

出る要素なくね！！？と気づいてしまいw w

でわでわ、次回もお楽しみに！！

感想など待ってます！！

第6話これって魔法なのかな？結局はただの斬撃だよね。（前書き）

昨日はすみません……書き終わりませんでした・

とはいってもこれを待っていてくれる人はいるのか謎ですけど
ね〜ww

さてさて、今回、ソラが開花します。

使用魔法とかは後で記述です〜

では、どうぞ。今回はほぼオリジナルなんで、できは…うん。

第6話これって魔法なのかな？結局はただの斬撃だよな。

「じゃあ、私はこれでいくわね？怪我無い様に気をつけてね」

「おう！ありがと、ミラ！！」

今日はちょっとキープレードの扱いに慣れるために訓練だ。

6話これって魔法なのかな？結局はただの斬撃だよな。

「よし！じゃあやっていくか！！」

妖精の尻尾の裏、ちょっとしたスペースがあるこの場所はギルドメンバー達の訓練場になっていたりする。魔法の試し打ちなどができるスペースで、結構広い。

ソラはそこでキープレードの力を見ていこうと、訓練に出ていた。今日の朝にルーシイから仕事に行かないか、といわれたのだが、自分でも把握していない力を他人に使うのが怖かった、というのもある。

って丁重に断った。ルーシイによると『変態オヤジ退治』だそうだ。正直戦えても断っていたかもしれない。

そんなことはさておき、今、ソラの目の前には3体のダミー魔水晶ラクリマ。つまり仮想の敵が。魔水晶というのは魔力を持っていない人でも使えるように作られた汎用魔法。簡単に言えば、魔力なしで使える魔法だ。今回使うのはダミー魔水晶。これはあたりを自由に動き、時折ビームのような攻撃をしてくるもので、訓練用に使われる。レベル設定によつてはスピードも変えることができる。

ソラはそのレベル設定を真ん中程度、あたりをゆっくり動く程度に設定し、起動させた。

そして、

「うっしや！訓練開始！！」

訓練を開始した。

とはいってもソラは戦闘に関して初心者。島でチャンバラをしていた程度。もちろんキーブレード、つまり剣の扱いも我流だ。なので

「うわ！」

隙も大きくなる。

「どうするかな……」

ダミーといえど、訓練用に作られたものなので、隙を的確に突いてくる。つまり1体に集中しすぎると周りの敵にやられてしまうということだ。

だからソラは3体いるダミーの位置をしっかりと把握しつつ、攻撃をしていかなければならない。

「これ、結構難しいな……」

しかし、諦めるわけにも行かない

「うん！がんばろう！」

ダミーにキーブレードを叩きつけていった。

-
-
-
-
-

妖精の尻尾ギルド内

「あいつ、がんばるな」

「漢なら強くあるべき!!! いいことだな」

グレイとエルフマンは訓練をするソラの様子を見ていた。
しかし見ていて思う

「やっぱ、動きが初心者だなありや。硬いね」

「筋はいいと思うがな」

「でもよ……ほれ、またよけられた」

二人から見ても、ソラの動きは”硬い”

周りを見ようと必死なのは分かるが相手との距離感がつかめていない。もし、相手が猛獣相手だったら自分から死ににいつてるようなもの、ということだ。

「筋はいいがありやあ危ねえ……うし！俺が少し稽古をつけてやるか！」

「お前が？」

「いいじゃねえかよ」

「別に悪いとは言ってねーよ……すぐに行くのか？」

「いや、もう少し様子を見とく」

「そうか」

二人は再び視線をソラに戻した。

「ほっ！…！よ！…！」

ソラは器用にボールを叩いて打ち上げていく。

「36、37、……」

次々と回数を重ねていき、

「50！！」

ラストにボールを大きく吹き飛ばした。

「おっしゃあ！記録更新……って！休憩のはずだったのに！！」

休憩時間とはなぜか集中できるもので、いつもできないようなことも簡単にできてしまう。それにしてもそこまで実力がついていなかったりする。

「はあ……逆に疲れた……再開しよ……」

自分の愚かさを嘆きつつ訓練再開。しかし

はあ、はあ、くっそー……全然あたらなない！！なにがいけないんだかなあ……

3体倒すのに何分もかかってしまい、必要以上に走る訓練となつてしまった。

何がいけなかったか、自分なりに考えてみる。

まず、間合いが取れていない。

それに一撃の威力が低いために1体のダミーを倒すのに時間がかかってしまう。

しかしなぜ、そうなってしまうかが分からない。

「やっぱり、誰かに見てもらったほうがいいかなあ……」

ギルドのメンバーを考えれば剣を使う人多いだろうし、そういう人に聞いてみるのもいいかもしれない。

しかしそう思った矢先

「お前はもうちょっと周りを見て距離感を気をつけたほうがいいな」

ギルドメンバーの一人、 그레이に声をかけられた。

「あ、えーっと…… 그레이!! どうしたんだ?」

「お前がいつしょーけんめいやってるのを見たんでな。 ちょっと稽古つけてやろうと思ったんだよ」

「ほんとか!? 助かった! 自分じゃ何が悪いかわからないんだよな」

教官がいるのと、いないのでは結果が大きく異なる。 何より客観的に見てくれるので悪いところが浮き彫りになりやすいからだ

「あともう一つ。 力入れすぎだ。 もうちょっと抜いて振りぬくようにやってみ?」

「お、おっ」

그레이に指摘をされていく。

「ま、見てやるから試してみろよ。 最初に今までやってた斬り方に、次にちよっと力を抜いたやり方な。 相手は…これでいいだろ」

そういつて 그레이は自らの魔法で氷でできた紡錘形の物体をいくつか作った。

「すっげえ!!!いまの 그레이の魔法か!?!」

「ん? ああ、氷の造形魔法^{アイス・メイク}ってんだ。ま、これは後で見せてやるから、今は集中しな」

「了解!」

剣を構え、まず一撃目

いままでのやり方。すなわち力任せに斬る方法。
やはりあまり威力は高くないようで、氷の半分のところで止まってしまった。

一度剣を抜き

再び剣を構える。

그레이に言われたとおり力を抜いて、振りぬぐことに意識を置く。
すると氷にキープレードが当たった後、スッ、と振りぬぐことができた。さっきとは全然違い、氷は真つ二つになった。

「うわ! すごい! 自分の力じゃないみたいだ!」

「だろ? まあ、俺はこういうの専門じゃねえから、もっと深い部分

とかはいえねえんだけどな。詳しくは……エルザに聞くといい」

「エルザ？」

「ん？そうか、お前まだ会ったことなかったな。エルザはこのギルド1の女魔導士だ。お前と同じように剣を使う。まあ、槍とかも使ってるけどな」

「へえ……」

「よし、この話はまただ。今度は空間把握の練習するぞ」

そういつてグレイは魔法を使い、氷の銃を作り出す
そして

「いいか？今から打つこの球を全部はじき返せ。そうだな……10
0個ぐらいか？1回でもミスしたら最初からな」

訓練を始めたが

「一球目からミスんなよ……」

終わるのは相当先のようだ

「95!.....96!!.....」

グレイが打つ玉をどんどんと打ち返していくソラ。この訓練を始めて2・3時間は経っている。何度も失敗して、何度もやり直した。しかしやっとここまでできた。

「98.....99!!!!」

「よっしゃあ!ラストだ!決めるよ!!」

「これで終わりだ!!.....100!!!!」

100個目を打った途端

「うへえ.....」

二人してへたり込んだ

「おまえあんなにボール打つの得意なくせに.....まあ、これで間合

いのとり方は分かったんじゃねえの？」

「見てたのかよ！……まあ、これだけやれば自分の間合いは分かった」

初めのほうは自分が攻撃できる射程がわかっていなかったため、まったく打ち返せなかったが、数繰り返していくうちに自分の間合いを習得することができた。

「うし、じゃあ最後な。さっきみたいにダミー倒してみ？」

「えー！！まだ動くのかよ！！」

「うるせえな！お前のためだろ！！それにさっきよりだいぶ早く倒せると思うぞ？」

「……はあ」

ため息をつきつつダミーを起動させる。

ダミーが動き始め、こちらへ攻撃しようとしてきたところでソラも攻撃を始める。

ダミーの懐へ入り、まず1撃。それは最初のときのように力任せではなく、スッと通り抜けるような感じでダミーを一閃した。

そして後ろから近づいていたダミーに振り向きざまに一撃。

その後、近づいて来てしまったダミーにコンボを決め、最後の一撃で、墜とす。

「うわぁぁ………すげえ………」

自分の体のはずなのに、その感覚がない。ソラの最初のようなフットワークではなく、自然な、流れる動きでダミーを倒すことができた。

そんな様子を見て、グレイはニヤツと笑った。

「全部お前の力だ。初めはどうなるかと思ったが、お前は筋がいい。強くなれるさ」

「そうかな！？よっしゃぁー!!」

ソラの喜びはしばらく続いていた。

訓練が終わった後、ソラとグレイは体をクールダウンがてら、いろいろな話をしていた。もっとも内容はソラのことばかりだったが。

「なら、お前は島に帰るためにギルドに入ったのか」

「おう。まあ、それがいつになるか分からないけどな。それにリクとカイリも探さなきゃだし………」

「ふうん……お前も苦労してんのな。大体リクとカイリは本当にここにいんのかよ?」

「あ」

「おいおい今気づいたって顔すんなよ!?!」

「あつはは!」

「笑い事じゃねえし!!」

話に花を咲かせていると、もうすっかり夕方に。結局丸1日ソラの訓練は続いた。

グレイが言うにあとは経験、だそうで、あとは仕事をこなして行くしかないようだ。まあ、これからの成長が楽しみだ、といったところでグレイの考察。

「はあ……いい加減中に入るか……」

「そだね」

二人してギルド内部に入ろうと、ギルドの正面に回りこもうとする。しかし、裏から出よう、といったところで

「「！！！！？」」

グレイとソラは二人して振り返った。

「今、なんかいたよな？」

「ああ、俺も感じたこともねえ。気をつけな」

二人はゆっくりとギルドの裏に戻る。すると

ピシン！という音がしてギルドの正面へと続く道に透明の結界が張られた。

「おいおいおい！なんだこいつらはア！」

「俺に聞くなって！！」

できた結界はキーブレードで叩いても、グレイの魔法でも突き通ることがなく、すべてはじき返してしまった。
そしてギルド裏のスペースには大量の黒い闇

「あ、こいつら！！島に出た奴！！」

「知ってるのか！？」

「ああ！地面に潜ったりして厄介なんだ。でもまあ、大して強くはないかな」

地面から現れたのは最下級ハートレス、シャドウだ。シャドウは地面に溶けつつ移動する。大して強くはないが、相手にするのは少々骨が折れる。

とは言ってもそれは以前のソラの話。シャドウ1体倒すのにも何回も攻撃しなければならなかったが

「はあ！！」

今は一撃だ。

相手の間を縫いつつ連続で何体も倒していく。

「は！やるじゃねえか！俺も負けちゃいられねえな」

そんなソラを見てグレイも奮起したのか

「アイスメイク、ランス槍騎兵！！」

氷で作った槍を飛ばし、連続で何体も倒していく。一発一発の槍が貫通するためにグレイの目の前には黒から切り離れたような筋ができた。

それを見たソラは

「すっげえ……………」

「感心してる暇があったら倒せよ……………」

まだまだハートレスは残っている。

「でもキリないなあ……………」

「だな…………仕方ねえ！出し惜しみしないで一気に決める！」

そしてソラとグレイは一度だけ背中合わせになり

一斉にシャドウに飛び掛った。

ソラはシャドウの間を縫い、通り抜け様に斬りつけていく。そして遠くにいるシャドウへ一気に近づき、突進攻撃。これだけで数匹のシャドウが闇に溶けた。しかし、一撃決めたら一瞬の隙は生まれて

しまう。間を縫うように行った走った先はハートレスたちの中心。ソラはシャドウに囲まれてしまった。

しかし、自身の魔力をキープレードに乗せ、キープレードを構えて大きく一回転

「それでも食らえ！俺の必殺技1！！ラウンドブレイク！！」

魔力を纏ったキープレードは斬撃自体を巨大化し、周囲のシャドウへ飛んでいく。大きくシャドウたちを吹き飛ばすとともに、消滅させた。

「おっしやあ！成功！！これ使える！！」

初めて使うにもかかわらず、一発で成功させる。それどころかコツをつかんだソラはそれを使いこなし、突進して相手の中心にわざと入り込み技を発動させ、多くのシャドウを一気に倒していった。

一方グレイ

「アイスメイク、ランス槍騎兵！！」

槍を出現させて一気に数体のシャドウを倒していく。
しかし魔法の性質上、前方にしか飛ばないために後ろからシャドウ

に攻撃されてしまう。
だがグレイはその攻撃を振り向きもせず

「アイスメイク、盾！」
シールド

氷の盾を出現させ、攻撃をはじく。それどころか盾を出現させたときにシャドウを巻き込み、背後にいたシャドウをも消し去った。

「はあ、本当にキリないなア……めんどくせえ……」

氷で作った弓で何体ものシャドウを吹き飛ばし、剣で切り裂き、ハンマーで叩き潰す。

ものすごい速度で造形魔法を操りどんどん数を減らしていった。

互いの敵ももう残り少ない。

二人は次々とシャドウをなぎ倒し、最後の一匹を倒す。そして自分の背後にある気配に向けソラはキープレードを、グレイは氷で作った剣を突きつけた。

「「あ」「

突きつけた相手はソラとグレイ。

どうやら同時にシャドウを倒したきつたようだ。

「オマエ、ずいぶんやるじゃねえか」

「グレイこそ、すごい早さだった」

互いに賞賛の言葉を上げて、武器を下ろした。
そして

「「うへえ……」」

二人してへたり込んだ。

グレイはへたりながらも考えていることがあった。

『ソラは訓練とかより、体で覚えるタイプ』と。つまり、結局は闘
い続ければ自然と強くなる、ということだ。

本来ならば今日の出来事はいらなかったのかもしれない。

グレイはフツと笑いつつ、ソラのほうを見る。
視界に移ったのは

「何にやけてんだよ……」

なんとも残念そうな人を見る目をしたソラだった。
すこし、恥かしくなったグレイだった。

ギルドに戻ると仕事から帰ってきたナツとルーシイが。
グレイはさっき出たシャドウのことをマスターに報告しに言ったの
でこの場にはいない

「あ、ナツ！ルーシイ！」

「おう、ソラ！」

「あ、ソラ！どうだった？訓練」

「もうばっちり！明日からは仕事いけるよ！！」

「本当！？よかった！もうあたしナツは嫌よも……無茶はするし、
報酬断っちゃうし……」

報酬を断る仕事ってどうなの？

「でもソラが来たからにはこのチームも解散よ！ナツ」

「え？チーム？」

「うん。仕事仲間って感じかな。仕事も楽になるんだけど、ナツだからねえ…。それに今回だって金髪なら誰でもよかったらしいし」

ナツのことをぼろくそに言うルーシィ

「なにいつてんだ。俺はルーシィだから選んだんだぞ？いいやつだし」

「ナツ！？」

ナツの言葉にドキツとするルーシィ。顔を赤くし、少し照れている。しかしその顔の赤さはナツが続きを言つと性質を変えた

「それにソラも付いてくるし！！」

「そつちが目的か！！」

「ええ！？俺！？」

ルーシィの頬の赤さは照れから怒りに変わった。

かくして、この三人は事実上チームとして動くことになった。この面子なら何とかやっていきそうだな、そう、思ったソラだった。

第6話これって魔法なのかな？結局はただの斬撃だよね。（後書き）

オチが考えられない！！ネタが考え付かない！！どうしようー！（笑）

そんなことより使用魔法紹介。

この小説ではソラのアビリティを魔法として使っていきます（笑）
まあ、ご了承ください

？スライドダッシュ

遠くの敵に近づきつつ突進攻撃を仕掛ける。ソラは半分移動にも使っている。

スライドダッシュという言葉を出さなかったのは「スライドダッシュ！」とか言いながら移動してもかっこ悪いだけだからです（笑）

？ラウンドブレイク

キーブレードに魔力を乗せ、周囲にいる敵に残骸を飛ばす魔法。

イメージとしてはBLEACHの月牙天昇。まあ、ゲームで使うラウンドブレイクの軌跡をもっと濃くした感じです。

乗せる魔力によっては威力も違います。たぶん。

こんな感じです。

感想待ってますね♪

第7話鑑の女はきつとギルド1の有力者。独裁者みたいだ。(前書き)

今回はただのまったり&話あまり進みません。あと自己解
釈多々あり!!
気をつけて!!

感想等待って増すたい

第7話鎧の女はきつとギルド1の有力者。独裁者みたいだ。

「ほら、ルーシイ早く仕事選べよ」

「前回はおいらたち勝手に決めちゃったから」

「なにいつてるの！解散って言っただでしょ！！？」

「え、解散なのか？ルーシイ一人ぼっちだぞ？俺、一回もチームで動いたことないのに。それに俺と行ってくって言っただのは嘘なのか？」

「うわ、ルーシイひどい。パートナーを簡単に捨てるなんて」

「なんであたしのせいなのかしらー！！！」

第七話

鎧の女はきつとギルド1の有力者。独裁者みたいだ。

少し時間をさかのぼり、妖精の尻尾内、朝

「へえ……ギルドっているんな仕事あるんだな」

「『魔法の腕輪さがし』に『呪われた杖の魔法解除』、『占星術で恋占い』！！？あたるのかしら！？」

ルーシィとソラはギルドの依頼板リクエストボードに来ていた。依頼板にはギルドに集められた仕事張られている。仕事はさまざまで、討伐系から探索系、魔法学校の臨時教師などもある。
ナツは絶対討伐以外出来ないな、うん。

「気に入ったのがあったら私に言ってね。今日は総長マスターいないから」

「あれ？総長マスターどこいったんですか？」

いつも総長マスターがいる場所にはミラがいる。いつもならば総長マスターがタバコをくわえながらのほほん、としているのだが……

「定例会があるからしばらくいないのよお」

「テイレイカイ？なにそれ？」

「地方ギルドのマスターたちが集まって定期報告をするのよ。前に話したでしょ？総長マスターのお仕事。その一つよ。でも今回は緊急召集みたい」

「緊急？」

「そう。ほら、ソラは知ってると思うけど、この間、『ギルドの裏で急に結界が出来たり、変なモンスターが出たりした』ってグレイが報告してきたのよ」

この前、というのはキープブレードの訓練をした日のことだ。

「あの黒い奴!!」

「そう！正確にはハートレスって言うらしいんだけど、その報告が他にもレヴィたちからもあったみたい。それで総長はみんなを招集マスターしたみたい。詳細不明の奴らだからきつと対策とかを考えてるんじゃないかな？」

「へえ……大変ねえ……」

少し、嫌そうな顔をしながらルーシィがうなづく。

「まあ、どんな奴が出るか分からないし、力も分からないから、初心者の二人にはチームを組むことをお勧めするわよ」

「チームかあ……」

ルーシイは軽くしかめっ面をしながら呻いている。

「でも、ナツたちと組んでるんでしょ？もちろん俺もだけど」

「そう……なのかなあ？」

「とにかく、仕事るときは気をつけてね」

「「はい」」

そういつてミラはカウンターに戻っていった。

どちらにせよ、チームは組んでおいたほうがいいらしい。ルーシイとしてはナツと組むのは反対のようだ。昨日の仕事が引つかかっているらしい。金髪の女の人なら誰でもよかったとか、なんとか。一方ソラはナツなどと組むほうに賛成だった。理由なんて特にないが、会えて言うなら、『楽しそうだから』だろうか。どんなことでも楽しいほうが言い決まってる

そう、思ったソラは、少しだけ頭をひねり、ルーシイをチームに参加させる為の作戦を考えた。

「いいか？ナツ、ハッピー」

「おう」

「あい」

「もう一度作戦の確認な。ルーシィをチームに引き込むために、一芝居。ナツが仕事を誘えば多分ルーシィは断ろうとするから、そこで俺が一回一芝居。そこでハッピーはうまくルーシィを煽ってみてくれ」

ここに『ルーシィをチームに誘おう大作戦(?)』が決行された。そして文章冒頭部に戻る。

そこには涙目でルーシィを見つめるソラ、非難する目のハッピー、にやけ面のナツが。
ルーシィをチームに誘うための作戦はなんとかうまくっているようだ。

「だ、大体ソラはナツがいれ平気でしょ!!!?それにナツはソラが目当てなんだからソラと行けばいいじゃない!」

と、ルーシィ。しかしそんな言葉に

「俺、ルーシイと行きたかったんだけどな」

と、ソラ

ルーシイがピクン、反応する

「おいら、ルーシイがいたほうが安心できる」

と、ハッピー

ルーシイがピクピクつと反応する。

（これはいける！！ナツ、頼むよ！）

（おう！任せとけ！）

アイコンタクトで会話をするソラとナツ。この間約1秒

そして最後に

「俺は、ルーシイがいい奴だから選んだんだ」

ルーシイは

「それは前回聞いた！！」

つつこみを入れた。

「「「はあ……」」」

「失敗かー」とため息を吐く男2人と一匹。それを見てルーシイは「うつ！」と、唸りを上げる。ここまで落ち込んでしまっているのを見ているとなんとも居た堪れない気持ちになっていく。

そしてルーシイはついに

「……し、仕方ないわね。一回よ！一回だけ行動するけどここでへんなことしたらもう解散だからね！！」

と。しかし、ルーシイは気づいていない。男達が落ち込みつつ顔はにやけている事を。

ソラの作戦はこうだった。

一つ目は前に書いたように、ナツが仕事を誘って、ソラが揺さぶり、ハッピーが煽る。

しかしこれで失敗した場合、二つ目として『必要以上にがっかりして、ルーシイの良心を抉る』という作戦を立てていた。

「「「おっしやあ！！」」」

と喜びの声を挙げる2人と一匹。

ここに一つのチーム（仮）が確立した。

その光景を見ていたのは 그레이 と、ロキ。

「お前ら何やってるんだよ……」

「ルーシイはこっちで愛のチームを結成しようじゃないか」

그레이の言葉だけに反応したナツ

「あ？何でもいいじゃねえか。この変態野郎」

「ああ！！！？誰が変態野郎だこらア！！！」

なぜか討論に。

「그레이……服」

「あああ！！しまったあ！！また忘れたあ！！！」

なぜかパンツ一丁の 그레이。さっきまで服着てなかった？
そんな 그레이 をみてナツは

「はあ、うぜえ」

そしてグレイもそれにつっかかってた。

「ああ？いまうぜえつつたかクソ炎！！」

「超うぜえよ変態野郎！！」

………なんで殴り合いになるんだよ。

一方ロキのほうも

「ねー」

「何が！！？」

ロキとルーシイが話している
すぐ横でナツとグレイが喧嘩してるのによく気にせず会話できると
思う。

「君って本当キレイだね。サングラスを通してその美しさだ……
肉眼で見たらきつと潰れちゃうな」

「潰せば？」

訂正。会話じゃなかった。一方的な意思疎通だった。

さらにロキは一度ルーシイの腰辺りを見たと思うと

「ごめん！僕達ここまでにしよう！！」

といって走って行ってしまう。

「なあ、ルーシイ、何か始まってたのか？」

「んなわけないでしょ？ソラはああいう人になっちゃダメよ」

「ん」

まあ、ロキみたいに女の人侍らせたくないしね。
ってナツ達はいつまで喧嘩してるんだよ……

「あ、なんか戻ってきた」

「へ？」

ルーシイの声を聞いてその方向に目を向けるとそこにはさっき走り去ったロキ。

「ナツ！グレイ！まずいぞ！エルザが帰ってきた！！！」

それだけ言うと、ロキは再び走って消えた。
何がしたかったんだろうか？

しかし、ナツと 그레이 のほうに目を向けるとがたがた震える二人。
どーしたんだよ？

そう、思うと同時に、ギルドの入り口からすごい音がした。

ズドオオン！！

そんな音がして、入り口の方に目を向けると、そこにはキレイな
緋色の髪をもった女の人
ギルド全体がざわつき始める

「うわ！エルザだ！帰ってきたのか！」

「すっげえ、あんなでっけえの倒したのか」

「うへえ……」

いろいろな声が聞こえる。

すごい人なんだなあ……あ、 그레이 がいった人ってこの人かな？
今度剣教えてもらわなきゃ

そのエルザというと

「お前たち、問題ばかり起こしているようだな。総長マスターが許しても私は許さんぞ」

といい、次々とギルドメンバーの注意をし始める

「カナ！なんて格好で呑んでいる！ワカバ！吸殻が落ちているぞ！
ビジャー踊るなら外で踊れ！ナブ！いい加減仕事しろ！！」

その後続くこと十数人一区切りしたあとに

「ふう、まったく世話が焼けるな。今日のところは何も言わないで
おいてやろう」

あきらかにいろいろ言っていましたよ！！！！

「風紀委員が何かかしら？」

「な、あれはすごい。学校にいるまじめな委員長みたい」

いたら怖い人だよ。思わずそう、つぶやくソラ。

「ところで、ナツとグレイはいるか？」

「あい」

エルザの問いかけにハッピーが迅速に答え、指（羽？）で指す。その先には

「や、やあ、エルザ。おお俺達、今日も仲良くやってるぜ……？」

「あゝい」

手をがつしり組み、肩を組んだなぞの二人。
何者？この人たち。

「そうか、親友なら時にはケンカもするだろう。しかし私はそうやって仲良くしてるところを見るのが好きだぞ」

「あ、いや、いつも言ってるけど、親友ってわけじゃ……」

「あい」

いやだからこいつらだれだよ。

「ナツがハッピーみたいになってる!!」

ミラによると

「ナツもグレイもエルザのことが怖いのよ」

「ええ!？」

だそうで。

図付きで説明してくれた。いつかのジャガイモの絵だ。どうやらあれはエルザとナツ、グレイの絵だったようだ。

「ナツはケンカを挑んでボコボコに、グレイは裸で歩いているところをボコボコに、ロキは口説いたら半殺しにされちゃったの」

ナツとグレイは、まあ、同情するよ。だがロキ、お前のことは忘れないよ。

心の中でそうつぶやいたソラだった。

そして、このあと、エルザによってもたらされることはこれからのソラのギルド生活を大きく揺さぶることになる。

第7話鎧の女はきつとギルド1の有力者。独裁者みたいだ。(後書き)

正直続き考えてません(笑)どうしようかなあ…

第8話噂って怖いね（前書き）

今回短いです！！ま、明日が休みなんで明日一気に書き上げます（たぶん）

では、今回もどうぞ！
感想とか待ってます♪

第8話噂って怖いね

「エルザが誰かに仕事を頼むとこなんてはじめてみたぞ!？」

「何か起きるんじゃないか!？」

「明日は雪か!？夏だけど!」

「いや、どんな状況だよソレ」

第8話噂って怖いね

「二人の力を貸してほしい。ついてきてくれるな？」

「はあ！？！」

エルザがナツと 그레이 にチームの誘いをした。それだけでギルド内がざわつき、「あのエルザが！？」とか、「どんな奴が相手なんだ！？」など、野次が飛んでいる。

どれだけエルザはすごい人なんだよ？確かに角だけで2mは超えるモンスター倒してるけどさ！！

「出発は明日だ。準備しておけ。詳しくは移動中に話す」

「え！？ちょー！！」

ナツと 그레이 の返事も聞かず、エルザはギルドから出て行ってしまった。

「おい！俺達行くなんて……はあ、もういねえし。どうするんだよこれ」

どうやら行くことは決定してしまったようだ。

「ね、ルーシィ。結局俺達のチームは一時解散かもね」

「そうねえ。結局ナツはいないし」

正直なところルーシイと二人で行ってもいいのだが、なんとも心細い。

初心者二人でいける仕事などあるのだろうか？

もつともルーシイはギルド内で「傭兵メイド」を倒してつてことになつてるが。

つてかそいつなんなんだ？傭兵かメイドかどっちかにしろよ。

「今なんかすごいこと考えなかった？傭兵とかメイドとか」

「んなことはないよ」

なんでばれたんだろうね。

そんなことをしているといつの間にかカウンターから出ていたミラがこう、呟いた。

「エルザ、グレイ、ナツ……これって妖精の尻尾最強チームかも！」

！！！！

「「ええ！！！」」

ソラとルーシィの叫びはギルドのざわつきによって消された。

一方、その最強チームメンバー達かというと、

「無理だ！！ただでさえこいつと一緒にだけでうぜえのに、エルザまで来るなんて！！」

「こんなチームありえねえ！！ってか行きたくねえ！！」

まったくまとまる事もなく争いが起こっていた。

無論、巻き込まれたくないのでソラとルーシィは離れたところで見
ていた。こんな状態で大丈夫なのだろうか？

するとナツがこっちに寄ってきた

「？どしたの？ナツ」

「うーん……やっぱりソラだな」

「なにが？」

何をする気なのだろうか？

そう、思っていたら

「ホアチャアアアア！！」

「え！！つちよ！！？」

なぜかナツの洋服とマフラーを着させられて

「オマエ今からナツな」

「いや、無理だって」

ところがどっこい。周りの反応は……

「そつくりね。髪の色以外」

「あい」

「あれ！！？」

わりと似ている様だ。でも結局は魔法とか違うからエルザにはバレ

ルよね。

その日の夜。

明日は出発の日なのでナツとグレイは既に家に帰った。なんだかんだで一緒に行くようだ。結局仲間思いなのか、ただ単にエルザが怖いだけなのかは、分らない。

ミラがいるカウンターではソラとルーシイが。そして

「あの3人が組めば素敵だけどギクシャクしてるのが不安なのよね」。ルーシイとソラは着いていって仲をとってもらってくれる?」

「「ええええ!!?」」

なぜか明日の仕事に巻き込まれることに

「無理だつて!俺達まだ仕事もろくにできないのに!!!!」

「あの暴走者達を止める自信ないわよ!!?」

だってあのナツとグレイだよ?誰にも止められないって。ただでさ

え危険なナツに加えて、すごい強いグレイだしなあ……
しかし、ミラはそんなことも構いなしに

「ほら、魔法の言葉教えてあげるからがんばって」

つと。そしてごにごにと『魔法の言葉』を教えてもらった。
こんなんで本当に止められるのかな？ ああ……明日休みたい。
本気でそう思ってるソラだった。

マグノリア駅構内

エルザと待ち合わせになっている場所にてエルザを待っていたのだ
が……

「なんでエルザみたいな化物がオレ達の力を借りたいんだよ！！？」

「しらねーよ！ つか”助け”ならオレ一人で十分なんだよ！」

「ああ！？ じゃあお前一人で行けよ！ オレ行きたくねえ！！！」

「じゃー帰れよ！ んで後でエルザに殺されちまえ！！！」

さっそくケンカに。

ここはギルドじゃないんだから自重してほしい。

「迷惑だからやめなさい!!」

一度ケンカをやめた二人。

「あんた達なんでこんなに仲が悪いのよ!!」

「何しにきたんだよ」

「俺達ミラに頼まれたんだよ。二人の仲を取り持ってくれって」

と、そこでソラは気づいた。

「それならハッピーがいたんじゃない？」

「あい」

「あらーかわいそう。ミラさんに完全に存在忘れられてる」

ハッピーってなんだかんだで空気だもんね。

つと、こんなことを話してるうちに

「なんでおめえはいつも布団持ち歩いてるんだよ？」

「ああ？寝るために決まってるんだろアホかオマエ？」

またケンカに。しかも論点ずれてるし。さっきまでのケンカはどうしたのだろうか？

そこで、周囲を見て、気づいたら駅の店が次々と壊れかけていた。これはまずい、そう思ったので
ソラとルーシィは顔を合わせて……

「あ！ー！エルザ（さん）！ー！」

あらぬ方向を指差してそう叫んだ。
ナツとグレイはピクツと反応して、

「今日もがんばってみよー」

「あいさー」

笑顔（？）で仲よさそうに肩を組んだ。

もちろんそこにエルザなどいない。これはミラに教えてもらった『魔法の言葉』

「二人はエルザの言うことは聞くから危なくなったらエルザの名前を出してみて」といつていたので即実行。効果覿面だ。

「「あっはは!!」」

大爆笑するソラとルーシィ。

「「騙したな!!?」」

息びつたりに叫ぶ二人。

本当は仲がいいんじゃないんだろうか？

「くそう、何でこんな面子で出かけなきゃなんねえんだ？胃が痛くなってきた！」

「魚食べる？」

「いるか!!」

「で、なんでルーシィがここにいるんだ？」

「何も聞いてなかったんですか!？」

うん。喧嘩してなくても騒がしいね。まあ、こういうの好きだけどさ。

そんなことをしているうちに本当にエルザがきたようだ。

「すまない、待たせたか？」

声の方向を向くと

大型の台車にキャリーバックを10〜20個くくりつけた物を引いているエルザの姿が

「荷物多！！」

思わずつつこむソラとルーシィ。
その声に気づいたのか

「ん？君たちはたしかギルドにいた……」

ああ、そういえば自己紹介してなかったな。

「新人のルーシィといいます。ミラさんに頼まれて同行することになりました。よろしくお願いします」

「同じく、俺はソラ！」

「なるほど、ギルドの奴らが騒いでいたのは君たちのことか」

どうやら噂伝いには知っていてくれたようだ。
ルーシイを見て

「たしか『傭兵ゴリラ』を倒したとか……頼もしいな」
と。

「それ、ナツだし、情報違ってる」

『傭兵メイド』だもんね。
そして今度はソラのほうを見て

「古代の魔法を使う、ルーキーとか。グレイから聞いたぞ。強いんだってな」

「ええ！？そんなことないって！これが初めての仕事だし！」

グレイ何言ってるの！！

「そうか……初めてにしてはつらいだろうが、よろしく頼む」

なんか、初仕事にしては辛そうだなあ……

「詳細は後で話すが、今回は少々危険な橋を渡ることになるがその

活躍ぶりなら問題なさそうだな」

大問題です!!!

今回の仕事大丈夫かな？無事に帰ればいいけど。

「何の用事が知らないが、俺は今回条件付で手伝ってやる」

ナツ？

「条件？」

「バ、バカ!!!お、俺はエルザのためなら無償で働くぜ？」

あたりに冷たい空気が流れた。そんな空気に耐えられないのか、 그레이が騒ぐ。

どうしよう、ちょっと本当に 그레이が強いのか怪しくなってきた。訓練のときはかつこよかったのに……

「言ってみろ」

「帰ったら、俺と勝負しろ!!!」

「!!!?!?!?」

勝負！？エルザって妖精の尻尾内1の女魔導士でしょ？勝ち目ないんじゃない！？

しかし、エルザは

「ついかにおマエは成長した。私はいささか自信がないが……いいだろう。受けて立とう」

勝負を受けてしまった

「うおっしゃあ！！燃えてきたー！！！！やってやろっじゃねーか！！」

その一言で火がついたのか、自身の顔にも火をつけながらナツが叫んだ。そして誰よりも早く今回向かう汽車へ乗り込んだ。

その後に全員が続く。エルザはうれしそうな顔で、グレイはげんなりした顔で、ルーシイは硬直状態。

ソラは無事に帰れることを祈る。

初仕事は少し大変そうだが、これからにおいていい経験になりそうだ。だからなんとしても無事で帰ろう。

そしてソラは胸を張り、堂々と列車に乗り込んだ。

列車に乗ってすぐ後。全員が止まっている、と思ったら

「うぶ、酔った……」

発射前の列車で酔っているナツがいた。
なんとなく、テンションが下がった。

第8話噂って怖いね（後書き）

うーん……おもしろいのかな？これ？

読者の皆さんとしてはどうなんだろうね？なんとかもつとネタ数を増やしたいです！

では、次回に！！あでゅー

第9話鉄の森(1)(前書き)

いやあ、すみません！

生物の課題が……！！

つてわけで何個かに分けさせてください。とはいっても明日には続き投下できたらいいなあって思ってるんで！

あと今回視点が3つになってしまいます。見にくいかもしれませんがあしからず。

ではどうぞ！

感想など待ってます♪

第9話鉄の森（1）

「では、詳細を話そう」

「そのまえに、ナツをどうにかしたほうがいいんじゃないの？」

「なっさけねえなあナツはよお……うつつしいから別の席行けよ。
っーか列車乗るな！走れ！」

「毎度のことながら辛そうねえ……」

「まったくしょうがないな。こっちにこい」

「ん？これってどけてることかしら？」

ナツをそばに寄せて、

「フン！！」

「グボア！！？」

思いっきり腹を殴り、気絶させた。

9 話鉄の森

「「「……………」」」

うん。何も見ていない。見ていないぞ。

「そ、そういえばエルザさんはどんな魔法を？」

「エルザでいい」

ルーシィもシラを切るようだ。まあ、そうしないと耐え切れないよなあ。

「エルザの魔法はきれいだよ。相手の血がいつぱい出るんだ」

「きれいな？ソレ……」

血って……こわ…。

そういえばグレイは剣を使うって言ってたなあ。きっとすごいんだろ。

「私のはたいしたことはない。それより私はグレイの魔法のほうがきれいだと思うぞ？」

「あ、ソレ俺も思う！グレイはすごいよ！なんでもつくれるんだ」

「そうか？」

「え？どんな魔法なの？見せて見せて！！」

アイス・メイク

確か氷の造形魔法って言ってたよな。

槍とか、剣とか。そんな奴作ってたな。

グレイは一呼吸した後、手を組み合わせて

「ふん！」

手のひらサイズの妖精の尻尾のマークを作った。
すげーきれー！

「わああ！」

「氷の魔法さ」

「氷ってあんた似合わないわね！」

「ほっとけ」

ん？氷？火？

ああ、なるほど

「ナツとグレイは正反対だから仲が悪いんだな」

「どういうことよ？」

「ほら、ナツが火で、グレイが氷だろ？」

「ああ！なるほど！単純過ぎてかわいいー」

「そうだったのか？」

「……………」

いや、グレイ否定しようよ。

こんなことを言われているにもかかわらずグレイは反論をしない。
本当にこんな理由なのか？

グレイはなにやら険しい顔で

「どうでもいいだろ！？そんな事ア！」

あ、逃げた。

「つーかそろそろ本題に入れよエルザ。一体何なんだ。オマエほどの奴が人の力を借りたいなんてよほどだぜ？」

列車が走って既に30分。今回の目的地、オニバス駅まであと少しらしい。

「そうだな。話しておこう。これは先の仕事の帰りだ。オニバスで魔導士の集まる酒場に寄ったとき少々気になる連中がいてな……」

エルザは今回の話について話し始めた。

子守唄^{ララバイ}？どついつことだろう？

「子守唄って……眠りの魔法の何かかしら？」

「わからん。だが封印されているという話を聞く限り、強力な魔法だと思われる」

エルザの話によると、どこかの魔導士が『子守唄』を手に入れたら

しい。ただソレは封印されているようですぐには使えなかったそうだ。その集団のトップはエリゴールという者らしい。

「話が見えてこねえなあ…得体の知らない魔法の封印をとこうとしてる奴らがいる。それならただの仕事かも知れねえじゃねえか？」

確かに。今日依頼板みたけど、『呪われた杖の魔法解除』ってのあったし。

「私もそう思った……エリゴールの名を思い出すまではな」

「エリゴールってさっきの奴らのトップ？」

「ああ。魔導士ギルドアイゼンヴァルト鉄の森のエース。死神、エリゴール」

死神！？

「暗殺系の依頼ばかり遂行してきた奴だ。本来暗殺依頼は禁止されているのだが鉄の森は金を選んだ」

おっかないなあ……ん？列車着いたのかな？

話をしちるうちに列車はオニバスの駅に着いたようだ。全員が席を立ち、出口へと向かう。

って！みんなエルザの話し聞いてるけどナツ忘れてるって！！

しかしそんなことは露知らず

「――……結果6年前に魔導士ギルド連盟追放。現在は闇ギルドというカテゴリに……」

話を続けていてこっちに気づかない。

「あーもう!」

仕方ないのでナツを抱えようと腰と肩に手をまわして持ち上げようとしたが

「重っ!」

重くてうまくいかない。

もともとナツより体が小さいソラ。それにぐったりしていて力が入っていない人を持ち上げるには必要以上に力がある。体重移動がうまくされないためにどうしても体重が重いほうに流れてしまうからだ。

そしてしどろもどろしているうちに

プシュー!

ドアが閉まってしまった。

……仕方ない。列車の人に行って降ろしてもらおう。

「ナツー、悪いけどもう少しがんばれ!ちょっと車掌さんにいって列車止めてもらってくる」

ナツを席に戻して、ソラはその場を後にした。

- - - エルザサイド

「で、鉄の森の場所は知ってるか？」

「それをここで調べるんだ」

ソラたちが消えたのも気づかず、街を進んでいた。
しかしルーシイが異変に気づく。

「ん？うそ！？ちょっとまって！！」

「なんだよ？」

「どうした？」

振り返る二人。

「ナツとソラがないんだけど!!」

!!!!!!???

全員の顔に焦りが浮かんだ

- - - - ナツサイド

「お兄さんここあいてる?」

一人の男がナツに話しかける。しかしナツには話す気力も余裕もなかった。

「あらら、つらそうだね。大丈夫?」

その男はナツの様子を見て一言言った後、ナツの正面に座った。そしてナツの肩を一度見て

「妖精の尻尾。正規ギルドかあ……うらやましいなあ」

この男、かの鉄の森のカゲヤマという。

……サイドソラ

「もう！わっかんないひとだなあ！ちょっとでいいから止めてって
！！」

「ですからお客様……そんな事言われましても……これは列車でありますから、次の駅で引き返して……」

「それじゃあみんないつちやうってば！！」

車掌と口論するソラ。

「しかし……」

「だから……！！」

口論はいたちごっこになりそうだ。

第9話鉄の森（1）（後書き）

いかがで？

すこし原作と変わってます。まあ、ちょっとずつオリジナルにしていきますよ。

では、また今度！！

お知らせ

ごめんなさい！ちょっと最近いろんなことがあって更新が遅れるかもしれませんがせっかく書いているハロウィンネタもいつ投下きるやら……って気づけばハロウィンネタは今日じゃないと意味ないんですけどね（笑）

まあ11月の最初の週までには絶対。

あとこっからはちよつとした質問です

ロクサスをもちろん出す気なんですけど、ちよこつと使いにくい立場にいるんですね。だから質問です

ロクサスをソラのノーバディにしないでいいですか？

というよりノーバディの扱いが難しいんです。

まあ、それに準じた何かにするんですが、ソラの闇落ちができなくて…

まあよろしく願いします。メッセで書いていただければ嬉しいです

特別企画！H a l l o w e e N ！！ （ 1 ）（前書き）

思った以上に長かったので二分割。

ついでに今回は本編にまったく関係ありません（笑）

まあ、ハロウィンだゝって思ってたんでやっってくださいw w

特別企画！Halloween！！（1）

「全員集まったかあ！！」

「「「おおおお！！」」」

「それじゃあ……妖精の尻尾！ハロウィーン仮装大会開幕だ！！！！」

……何コレ？

特別回

Happy！！Halloween！！

朝

ソラは目が覚めたら自分の違和感に気づいた。眠り眼で洗面台に行き、自分の顔を見て

「何だコレ！！！」

叫ぶ。そこに写っていたのは

「ヴァンパイア？」

服装は白いものから黒を基調としたものになり、指のほうも若干とがっている手袋が。足には赤い包帯のようなものが巻かれていて、背中には黒い羽。

口元には鋭い歯が伸びていて、目元も若干黒い。そして頭にはかぼちゃでできたようなお面が。そこで気づいた

「あ、そっか！今日はハロウィンだ！！」

とりあえず、家にいてもしょうがないのでギルドへ向かった。

- - - - -

家を出るとそこには

「とりつく・おあ・とリーとー!」

小さな子供達が仮装をして家々を回っている。よくみると商店街のお姉さんたちも仮装をしていて、魔女やおばけ、まさかのフランケンまでいた。

「すごいなあ……こんなにすごいハロウインはじめてかも!」

島でもハロウインの風習はあったがここまで大掛かりでもなかったし、仮装している人も少なかった。

面白そうだな……

そうしてソラはすこしゆっくりの歩調にしてギルドへ向かった。

妖精の尻尾内

「おいおい、ナツ、お前どーしたんだその格好は」

「知るかよ。朝起きたらこうなってたんだ」

「っはは！！ナツ、似合ってるぜえ！」

妖精の尻尾内にできた人ばかり。その中心にはナツが。
しかしいつもの格好ではなく、赤と黒を基調とした執事のような服装に。

「ったく。いたずらにしては手が込んでんなあ……誰がやったんだよ」

そしてその人だかりに近づく男が

「なんの騒ぎだ朝っぱらから……」

欠伸をしながら近づいてきたのはグレイだった。

「お、グレイか。見るよこのナツの格こ……」

「グレイ？どうしたその格好？」

ギルドのメンバーはグレイの格好を見ると全員が目を丸くした。

「おいおい？なんだよ？服は脱いでねえぜ？」

「いや、それが普通ないんだが……自分の服装見てみるよ」

「ああ？俺は今日普通の服を……ってなんじゃこりゃ！？」

グレイの服装は黒を基本とするタキシード。そして腰にはなぜか銃が。

そしてグレイが自分の服装に驚いているころ、ギルドの入り口のほうでは……

「ちょっとなんなのよ！コレは！！」

そこには黒いとんがり帽子をかぶり、暗い紫のワンピースのような服を纏っているルーシィが。しかもショートパンツをはいていて腿が露になっている。

「よおルーシイ。変な格好してるな！」

笑いながらナツが話しかける

「笑い事じゃないわよ！朝起きたらこの格好だし、なぜか脱げないし……」

「俺も脱げねえんだよなあ……なんなんだよこれ」

「あんたのソレ執事？あつはは！似合わないわねえ」

「ルーシイは魔女だな？パンツ見えてんぞ」

「きゃあー!!」

ルーシイのパンチがナツの頬にクリーンヒット。
そんなことを言っているうちにソラもギルドに着いたようだ

「うわあ！すっげえ！みんな仮装してる!!」

ついたとたんに興奮。

「ルーシイとかナツとかも仮装してるのか？」

「違うわよ。なんか脱げないの」

「俺の奴も燃えねー」

「なんだみんないっしょか」

「え？ソラもなの！？」

「うん。朝起きたらこの格好で……」

そうやらみんなおんなじ状況のようだ。

そこに 그레이 も集まり一言。

「なんなんだこれは……まるで仮装大会みたいじゃねえか」

この一言が原因か否か。だれかがこう叫んだ

「妖精の尻尾仮装大会の開催だぁー！！！！」

そこでギルド内は一瞬静まり、

「『ウオオオオオオ！』」

大いに盛り上がった。

「さーあ 始まりました！！妖精の尻尾ハロウィン仮装大会！！しかもはこの俺、マックスが勤めさせていただきまーす！！」

気づけば妖精の尻尾前の広場に大きなステージが出来上がっていて
気づけば6番の番号を渡されて

気づけばみんなと一緒にステージ裏に放置されてた。

ええ！？これどういうこと！？

なんか街ぐるみの大きな大会になってない！？？

「皆さん、今日は何の日かご存知ですかあ！？そう！ハロウィンです！！子供たちはちゃんとお菓子をもらったかあ！？」

マックス司会つまいなあ……会場すごい盛り上がってるよ……
ん？人多くない！？

「さてさて、今日の発端は朝のこと。うちのギルドメンバー達がなぜか仮装を……ハロウィンだからか？今日の依頼数は0！！そしてギルドメンバー全員による仮装大会が開かれました！！」

「それじゃあ行くぞ！！？」

「全員集まったかあ！！」

「「「おおおお！！」」」

「それじゃあ……妖精の尻尾！ハロウィン仮装大会開幕だ！！！」

「「「ウオオオオオオオオ！！」」」

なにコレ？

特別企画！Halloween！！（2）（前書き）

こっちだけ長いのは秘密。

あとオリキャラ……キャラ（？）あります。詳細はあとがきで！

特別企画！H a l l o W e e N ！（2）

マックスの説明を聞いていくうちにいろんなことが分かってきたな
まず今回の仮装大会はなんと賞金も出るみたい。マスターがノリノ
リで出したんだってさ。
マスターも暇だなあ……

んで、賞が3つ。

まず、かつこよさ部門。

これは男女問わずもらえるらしい

つぎに、かわいさ部門。

まあ必然的に女の子だらううな。

最後に総合部門

コスチュームから全部をあわせての部門。

総合部門に勝つとハロウィーンキングの称号がもらえるんだってさ。
しよじきもらってもどうしようもないかも。
それで今回の出場者は

俺、グレイ、ルーシィ含めて7人。

ナツはやらないんだってさ。なんとも街の菓子を全制覇する、とか
なんか。

各自アピールタイムがあるみたい。

それで気になるのが賞金。

まさかの50万Jだって！最初はみんなやる気なかったんだけどコレ聞いた途端

「『賞金はもらった（わよ）！！』」「」

って。

あとみんな各自の格好は知らないんだよね。どんな格好なんだろう？

あー誰が優勝するかなあ……！！俺も優勝してみたいから本気で行く
こう！！

あ、早速始まったみたい。1番は……グレイか

「それでは早速行ってみましょう！ギルドの中でも強豪！エントリーナンバー1番！氷の魔導士グレイ！フルバスター！！！」

あたりが歓声に包まれる。

グレイは魔法で氷のかぼちゃを作り出して腰にある銃でどんどんと打ち抜いていく。

そして出来上がったのは

「おおーっと！コレはすごい！氷でできたジャックランタンだあ！！」

そしてドヤ顔を決めて控えに戻ってきた。

すっげえ……コレ決まっちゃったよ。かつこよさ部門で1位いけるんじゃないかな？

「はいはい、ありがとございました。エントリーナンバー2番！！このギルド位置の酒飲み！カナ！アルベローナ！！！」

ん、今度はカナみたいだ。カナも出てたのか

カナは……うわ！まさかのミイラ男……女？

カナは自分のカードを一気にバラまいて自身を取り囲んだ。
そして出てきたのは……

「おおーっと！ミイラ男の姿でどうなると思ったが、コレはすごい
！……水着に着替えたー！！」

「50万、いえ、酒代はいただいた」

一通りアピールが終わると控えのほうに帰っていった。
そこでふと殺気？を感じたので、ステージの方を見ると

「色気仕掛けか……」

「その手があつたな」

ルーシィとエルザが。

つてエルザも出るの……？

「エントリーナンバー3番！このギルド1の女魔導士……妖精女王
テイターニア

！エルザ！！スカーレット！！」

エルザはいつもの鎧姿のままステージ中央に立ち、

「私のおき、ハロウィンver.だ！」

そして魔女姿に。

ミニスカートとニーハイを履いて足を強調し、体のラインがしっかりと出してしまうようなピッタリとしたコスチューム。

会場は一瞬静まって

「きゃー！！かわいいー！！」

「ウオオオ！！ミニスカート！！」

「結婚してー！！」

一気に盛り上がった。

「うむ」

マスターもうなずきながら鼻血を出している。
そしてキリツとした顔からにやりと笑い、エルザは壇上から立ち去った。

「あっちゃー……これは勝てないわー……」

ルーシイはエルザの姿を見てがっくりとうな垂れた。
あまりにかわいそうなので

「大丈夫だつて！ルーシイなら勝てるよ」

と声をかけておいた。

まあ、ルーシイなら優勝狙えるよ。多分。

このあと順々に発表されていった。

4番、ミラジエーン お化け姿。

白い布と髪の毛がマッチしてて盛り上がったなあ。ただ布に描かれてる絵のエレガントさのせいで悲鳴が……

5番 エルフマン フランケンの格好が似合いすぎて……会場から

悲鳴も上がった。

まあこの二人は変なところで似てる兄弟だった。

そしていよいよ俺だ……

「エントリーナンバー6番！ギルド内の期待のルーキー！！ソラ！！」

……緊張してきた。

ソラはステージにあがるとその場でクルリと一回転して、キープレードを上に掲げた。そして上空に向けて花火を放つ。そしてキープレードを上空に投げてその場でバク宙。キープレードをキャッチしてきれいに着地。

まあ、一人のアピール時間は30秒ぐらいだからこんなもんだろ

最後にソラは会場に向けてニヤリ、と笑った。

「ヒュウー！やるなあいつ！」

「あーん、お子様バンパイアかわいいー！」

まあ、盛り上がりはまあまあといったところかな？

そして会場から出て行く。

うーん……まあうまく行かなかった気がする。

でもまあ、エルフマンみたいな失敗はなかったから良いか！

楽観的なソラだった。

「そして最後！こちらも新人！新人だが既に武勇伝を持つてるぞ！
エントリーナンバー7！ルーシイ！！」

あ、今度はルーシイだ。

何やるんだろう？

ルーシイはステージの上に立って、ゆっくり歩いていく。
そして自慢の胸と足を見せ付けるよう前かがみになって、

「うふふ」

会場は一気に静まる。

全員が全員、ステージの方を見て啞然としている。

「え？あ、あれ？」

ルーシイからも疑問の声が。
失敗しちゃった！？

そう、思ったルーシイだったのだが

「ルーシイ！危ない！！」

その声によって気づく。
ルーシイの背後には

大きなかぼちゃの頭に黒い手足、おなかは大きく出ていて、背中には長いマントというなんともハロウィンらしいハートレスⅡマッド
パンプキン

「うわあああ！会場のお客様は早く逃げて！！」

マックスがお客を誘導して全員を逃がす。そしてついでに自分も逃げた。

つておい！マスターたちまで逃げちゃったよ！！

一方ルーシイは

「ええええ！！私のアピールタイムなのに！！！」

………そんなこと言ってる場合じゃないんだけどなあ。

ソラはあきれつつも大急ぎでステージに向かった。

「ルーシイ大丈夫？」

「平気。それにしてもおかしいわね。なんでみんなでて来ないのかしら？」

そういえばそうだ。ここまでの騒ぎになればステージの裏の人たち、グレイやエルフマンならすぐに出てくるはずだ。

「おかしいね」

そう、うなずいてすぐ、おかしな声が聞こえた。

（おい、てめ！蹴るんじゃない！！）

（狭いんだよ！しょうがねーだろ！？）

ん？グレイとエルフマンの声？

（おい！私の胸触ったの誰だ！！）

（ん？誰だこの足！！）

（あらあら、大変ねえ）

今のつてエルザとカナとミラの声だよな？

「ルーシイ、今さ」

「うん。アイツの腹の中からだ」

聞こえた先はぽっこりおなかのマッドパンプキンからだ。
姿は見えずとも無事だと分かったので…

「おーい！！みんな！そこにいるの！？」

叫んでみた。

どうやらソレは聞こえたようで

（ん？今のソラか！？）

中から 그레이 の声が

「 그레이 ！大丈夫なの！？」

今度はルーシイが叫ぶ。

（大丈夫だ！中はなんともない！）

「どーしてそんなことになっちゃったのよー!!」

（しらねえよ！アピールが終わってゆっくりしてたら小さいこいつが現れてよオ。危なそうだったからぶっ倒そうと思ったんだが何にも効きやしねえんだ）

「何も効かない!？」

（そオだ。んで、気づいたら飲み込まれてた）

うーん？どうしよう？

すると今度はエルザの声が

（私はステージから出た後いすに座っていたらそいつが来てな。あまりにかわいかったからなでてたら……）

かわいいって……こいつかなり怖いよ!？
やっぱエルザっておかしいかも

「ルーシィどうする?」

「うーん？何もしてこないし、放っておいてもいいけど、そうもい

かないもんね」

そんな話をしたりしているのに、マッドパンプキンはこっちに何かをする様子はない。

それどころか自身の手を前に突き出しゆらゆらゆれている。

その様子を見て、ソラはふと思い出した

「トリック・オア・トリートだ！……！」

「え？」

「ルーシィ！なんかお菓子持ってない！？」

「えー？……あ、街でもらった飴！」

「それでいいや！頂戴……！」

「は、はい」

ソラはルーシィから飴を受け取ると、それをマッドパンプキンに投げつけた。

するとマッドパンプキンはそれを両手でつかみ、口の中に入れる。そのあと大きく飛び上がった喜ぶようなしぐさをした後、ぽっこりしたおなかから何かを吐き出した。

「ふう……ん？あら、大きくなったわねえ……」

吐き出したのはミラだ。

なぜかマッドパンプキンはミラを見ておびえている。どうしたのだろうか？

とまあ、そこいらへんの追及は置いておいて、ルーシィ達は話を続ける。

「で、さっきのはなんだったのよ？」

「ほら、小さい子達が大人の前に行ってお菓子をもらいに行くだろう？」

「なるほど！お菓子のおねだりね？……でもなんでみんなは飲み込まれたのよ？」

「だからトリック・オア・トリート。『お菓子くれないといたずらしちゃうぞ』ってね」

「あーなるほど」

つまり、マッドパンプキンはみんなの前でお菓子をもらいに行ったのだ。

しかしグレイはソレを見て即攻撃。

エルザは撫で始め

おそらくエルフマンは無視

ミラは……まあなにかしたんだろう

「じゃあお菓子を上げればいいのね？」

「おう！多分それが正解！」

「よし。じゃあコレを食べなさい！！」

ルーシイは持っていた飴を投げつけた。

するとさっきのように両手でつかんで口の中に放り込んだ。

しかし量が足りなかったのだろうか？誰も出てこないし、むしろおねだりするようにこっちを見ている

「量が足りなかったのかしら？でも私これ以上何も持ってないわよ？」

「俺もないしなあ…どうしよう」

二人して頭を抱える。

するとそこに一人の声が

「なにやってんだ？」

そこにいたのはお菓子を両手いっぱいを持ち、口にも何本もの棒キヤンデーをくわえたナツが。

「「ナイスタイミング！！」」

二人はナツからお菓子をぶんどる。

「うお！！？なにすんだ！？せつかくのお菓子！！」

「緊急事態なんだから我慢しなさい！」

そしてルーシイはすべてのお菓子を投げつける。

「ほら、あとでまたあげるって。ルーシイが」

「なんでよ！」

続いてソラも投げる。

「ああ、俺の菓子が……」

ずっと沈んでるナツを置いて、マッドパンプキンを見ると、
両手で抱えたお菓子を一つずつおいしそうに食べている。

するとまたおなが開いて、グレイ、エルザ、エルフマンと順々に
出てくる。

「あはあ。ひでえ目にあつた」

「おお……まだいたかパンプキン！」

「ん？ん？」

そこには仮装の状態の3人が

一方、マッドパンプキンはというと

両手いっぱいあつたお菓子をすべて口に放り込みジャンプをして大喜び。

そして最後に大きくジャンプをすると闇に解けて消えてしまった。

「はあ、これにて一件落着き！」

「だね！」

ソラとルーシイはついてきていない周りを放っておいてハイタッチをした。

そのころナツは

「俺の菓子……」

この騒動が終わった後もずっと沈んでいたらしい。
ソレを見て不憫に思ったルーシィとソラがナツと一緒にいろんな場
所に食いに言っただとか何とか。

「おーい！ 仮装大会の結果が出たぞー！！」

「お！ かつこよさはグレイか」

「かわいさはエルザだな！！」

「総合は

ソラとルーシィだ！！」

特別企画！Halloween！！（2）（後書き）

と、言うことでハロウィン企画でした

正直言って何も考えずに行き当たりばったりで書いたので支離滅裂（笑

ミスコンみたいな感じのノリでした。ルーシイのときに何かが来るのはお約束！

あとオリジナルハートレスね！

マッドパンプキン

ハロウインのときのみに出てくる。

何もしないので害はないが、危害を加えると飲み込まれる。

お菓子をあげると喜ぶ。その姿がかわいくてハロウィンでは人気なキャラクターに！

っていう設定が頭にありました（笑）

人気もクソもハートレス自体出て北の最近だろって言うのは秘密w

では、次は本編で！！

感想待ってますねww

第10話鉄の森（2）（前書き）

なんか全然進みませんです。

更新遅れるに加え申し訳ない。今回はオリジナル成分たっぷりでございます。多分鉄の森編はほぼオリジナル（笑）

感想待ってます！特に今回は戦闘に力を入れてみたのでアドバイスなどありましたら！！

第10話鉄の森（2）

「うらやましいなあ、正規ギルド。妖精の尻尾って言えばさあ、ミラジェーンが有名だよな。たまに雑誌とか載ってるし綺麗だよな。何で現役やめちゃったのかな？まだ若いのに。あとさあ、名前とか知らないんだけど……」

「……………」

第10話

鉄の森（2）

- - - ナツサイド

ああ？何だこの男。さっきからべらべらと……

ってかエルザ達はどうした？まさか置いていかれ……！？早く追いつかねえと……ウブッ…やっぱ無理。列車動いてるし

「……ちのギルドまったく女つ気なくてさぁ……少し分けてよ」

ナツの目の前に座る男、カゲヤマは反応がないナツに淡々と話しかけていた。
が

「なーんつつて」

ゴッー！！

足を大きく振り上げ、ナツの顔に蹴りをかます

「シカトはやだなぁ……闇ギルド差別だよ」

「ああ？」

「おーやっとしゃべってくれた。ヒヤハハ！」

「何、すん……だ……てめ……」

ナツの声は切れ切れに

「えー！？何？よく聞こえないよ。妖精の尻尾ついていやあ、随分目立ってるじゃない。正規ギルドだからってハバきかせる奴ってムかつくんだよね」

カゲヤマはナツに近づいた

「うちら妖精の尻尾のことなんていつてるか知ってる？ハエだよ、ハエ」

そしてナツの頭に向かって

「ハエ叩きーっ！えいつえいつ！！！」

ぴしぴしチョップをする。

コノヤロウ、人の事馬鹿にしゃがって……

「てめ……」

「お？やるのかい？」

ナツは自身の手に火を纏わせて

「くあああー！！」

殴ろうとするのだが

「ウプッ」

「ぎゃはは！何だその魔法！！」

酔いが邪魔でうまく作動しない

「魔法ってのはこうやるんだよ！」

それどころか

「うごっ！！」

カゲヤマの魔法で吹き飛ばされてしまう。

「くそっ……」

こんなやつ、列車が止まってりやあなんでもねえのに……！！

その思いが届いたのか否か

「うお！なんだ！？急停車か！？」

列車は大きく揺れて急停車した。

そのときにカゲヤマの荷物が床に散らばる。そこにはどう見ても怪しい髑髏っぱい笛

「ん？」

「見たな！？」

しかしナツにそんなことは関係ない

「さっきはやってくれたな」

「！？」

ナツは再び手に火を纏わせると

「お返しだ！！」

「ぐもっ！！」

カゲヤマに思いつきり殴りかかった。
カゲヤマは大きく吹き跳んだ。

「ハエパンチ」

「て、てめえ！！」

カゲヤマはナツをにらむが

『先ほどの急停車は誤報によるものと確認できました。まもなく発車します。大変ご迷惑をおかけしました』

とアナウンスが

「マズ!!」

ナツは自分の荷物を取り出すとすぐに逃げれる準備をする。

「逃げよ!!」

しかしそこへ吹き飛ばされたカゲヤマが駆けつけた。

「逃がすか!! 鉄の森に手を出したんだ!! ただで済むと思うなよ
ハエがあっ!!」

「こつちもてめえの顔覚えてぞ! 散々妖精の尻尾馬鹿にしゃがって
!! 今度は外で勝負……ウプ!!」

ナツはカゲヤマに向かい指を刺し宣言するが発車し始めて戻ってきた揺れのせいでちゃんといえない。

今にでも列車から出たかったのでカゲヤマのことを放置して

「とう!!」

窓から身を投げた

「ナツ!!」

ん？今誰か呼んだ？
そう、思ったのは既に空中だった。

- - - - - ソラサイド

「だから止めてって！今仕事の途中なんだって！」

「さっきか申しております通り、そういわれましてもできないので
ごしまいま・・・!!?」

いたちごっこが続いていたソラと駅員。しかしソレは列車の急停止
によって止められた。
なんだよ、止めてくれるんじゃない

「なーんだ。止まるじゃん。じゃ、俺は降りるからね」

「お、お客様！？お待ちください！！コレは誤報だからすぐに発車
して……」

ソラは駅員の制止の声を無視してナツのいる車両へ向かう。

しかしその途中で

『先ほどの急停車は誤報によるものと確認できました。まもなく発車します。大変ご迷惑をおかけしました』

というアナウンスが。しかもほぼ間髪をいれずに列車も動き出す

「やば！！ナツが！！」

ソラは走り出し、急いでナツの場所へ。

後一つでその車両だ！というところで見えたのは

「とう！」

窓から身を投げるナツ

「ナツ！！」

ナツに呼びかけるがそんな声に気づかない。

仕方がなく、ソラも急いで飛び降りようと思ったが、身を持ち出してみると

「早！！」

すでにスピードを出して、遅れた分を取り戻さんばかりに進む列車。これでは飛び降りることなんて無理だろう。

「はぁ……どうしよう」

そう、うな垂れるソラに、一つの声が

「おい、オマエ！あの魔導士の、妖精の尻尾の仲間か！？」

「ん？」

振り向くとそこには長い髪を後ろで束ねた細目の男

「オジサン誰？」

「オジ……！！？俺はまだ20だぞコラ！！」

あ、いっけね。もっと年上かと思ってた。

「魔導士ってナツのこと？」

「そうだよ！」

「まあ、仲間だな。俺も一応妖精の尻尾の一員だし」

「くそっ！てめえらのせいでひどい目にあったぜ！！エリゴールさんになんていわれるか……」

エリゴール？エリゴールって言ったかこいつ！！

「お前！エリゴールって事は鉄の森だな！！」

ソラはキーブレードを持ってカゲヤマに対峙する。

「だからどうした？……そうだな……こいつをエリゴールさんの土産にしてやるっ」

カゲヤマはソラに対し構えの体制をとり、地面に手を置いた。

「俺が戦うのも面倒だからな……お前の相手は、こいつらだ！！」

そして

「ハートレス軍団！！来い！！！！」

そう叫んだ。

すると地面からハートレスが現れる。

「お前！ハートレスを使うのかよ！」

ソラはカゲヤマからハートレスに標準を変えて、飛び掛る。

黒い影のハートレス〃シャドウは何度も相手をしたことがあるが、今回は兜をかぶったようなハートレス〃ソルジャーや、腹が大きいハートレス〃ラージボディもいる。どんな相手かわからないから慎重に行こう。

ソラはまず慣れているシャドウを先に倒した。そして次はソルジャーに向かう。ソルジャーはシャドウのように地面に潜ったりすることはないが

「うわ！」

一気に突進攻撃を仕掛けてくる。そして攻撃をしようとしても、くると身を翻され、避けられてしまう。ソラは一度からだの動きを止めて、ソルジャーが突進するのを待った。そして突進してきたところを見計らって

「ほっ！」

キーブレードを横にして突進を受け止める。全体重を突進に乗せていたソルジャーは完全にバランスを崩してしまい、その場にへたり込んだ。ソラはこの隙を見逃すことなく、ソルジャーを一閃した。

そして最後に残ったのはラージボディ。

ラージボディは正面から攻撃しても硬い腹で跳ね返されてしまった。防御力と体格が大きい分動きは遅いらしい。ソラはラージボディの裏に回りこむと連打を叩き込んだ。

それに怒ったのか、ラージボディは腹を一回叩くところらに向けて突進してきた。回避をしようと思ったが……

「いつ!？」

ここは列車の中。回避する場所などない。そしてその一瞬が隙となつて

「うわぁ!!！」

吹き飛ばされてしまった。

しかもその次の瞬間には再び突進してくるラージボディ。

回避が無理だと分かったのならガードするしかない。しかし体格差がある分、衝撃も大きくなると予想していたので、ソラはアキレス腱を伸ばすように腰を落として、キープレードを横に構えて衝撃に備える。

そしてそこにラージボディが突進した。

「くうう……!!！」

ラージボディの突進に見事耐え切る。さらにラージボディは跳ね返され、バランスを崩し腹ばいに倒れ、起き上がれずにもがいている。その間にソラは体勢を立て直すとラージボディに一気に近づき、連撃、ラッシュバックを決める。そして最後の一撃で上に打ち上げ、ボールのようにフルスイング。ラージボディは消え去った。

「ふう」

ソラは戦闘体制を崩す。いや、崩してしまった。

「おいおい、俺を忘れてないか!？」

後ろからカゲヤマの声
今度はカゲヤマが自身の魔法で攻撃。

「がつ!!?」

ハートレスの戦闘直後で完全に油断していたソラはソレを諸に喰らい、意識を失った。

- - - エルザサイド

列車を（強制的に）止めて列車を追いかけるとなぜか列車からナツが飛んできた。ナツの話によると列車には探していた鉄の森の奴らがいたらしい。さらにソレをナツは見過ごしたという。

ナツの奴……全く話を聞いていなかったな

「さっきの列車に乗っているのだな？今すぐ追うぞ！どんな特徴があった？」

「特に特徴はなかったなあ……ただなんかドクロっぽい笛持ってた。三つ目があるドクロだ」

「なんだそりゃ。趣味の悪い奴だな」

ドクロの笛……何かの道具か？
そこでルーシーが声を上げる

「その笛がララバイだ！！」

「何！？」

笛がララバイ……

全員の頭に？が浮かぶ。

ルーシーによるとララバイは呪殺の一種で

「聞いたものすべてを殺す……だと!？」

集団呪殺魔法だった。

エリゴールめ……何をする気だ……!? なんとかしても止めねばならん
!!

「急いで追っぞ……とにかく線路沿いに進む!!」

「おう!」

ん? ところでソラはどこだ?

「ナツ! ソラはどうした! お前と一緒にだったろ?」

「ああ? ソラ? いなかったぞ? 俺はてっきりお前と一緒にいるものだ……」

「嘘!!? てことはソラはまだ列車の中!!?」

「何!!!?」

クッ! まずい! ナツが既に一度襲われている。ならばソラも襲われていると考えて間違いないだろう。
状況は思っていたよりも悪いらしい。考え方にもよるが、いまだソ

ラは列車の中。それも鉄の森と一緒にいる可能性が高い。

「急ぐぞ!!」

私達は急いで線路の続く町、クヌギに急いだ。

第11話鉄の森(3)(前書き)

いやあ、無双。本当に無双。

第11話鉄の森（3）

ん……？？ここどこだ？？

目を覚ましたソラは自分の異変に気づく。ソラの体はロープでぐるぐる巻きになっていて身動きが取れなくなっていた。幸いにも足は縛られていなかったので、立つことが出来れば歩けるだろう。

そっか。俺捕まったのか……皆に迷惑かけちゃったかな……

ソラは一人落胆する。

とは言ってもこのまま皆を待っていても仕方がないので、行動を起こすことにした。ソラが今いるのは一つの部屋らしく、扉の向こう側から声が聞こえる

すこし賭けになるけど……！

ソラは壁を使ってなんとか立ち上がり

ドガッ！……！

扉に向かって体当たりをする。

ドガッ！……！ドガッ！……！ドガッ！……！ドガッ！……！

すると予想通り人が出てきた。

ソラはそれに構わず、更に体当たり

「うるせえぞ！！何してやが……フゴッ！……！」

体当たりしたときに上手く頭が顎に当たったらしく、男は一発で昏倒した。

「よっしゃー!!」

ソラは男を背中に荷物を調べる。すると案の定、ナイフが見つかった。

それを巧みに操り、

プチッ

縄を切る。

自由になったソラは足音を立てないように歩き、部屋を出た。

部屋を出るとソコは駅らしく、大きなプラットホームが。中心には人が集まっけていて何かを話している。何を話してるか分からないけど。

どうやら大鎌をもった男が頭らしい。近くには俺と戦った奴、カゲヤマもいる。ってことは……

あいつら鉄の森か!!

そして真ん中の奴が死神エリゴール！！

ルーシィ達に伝えないと……

ソラはこっそり部屋を出ようとしたのだが……

「うわわ！！」

足元にあつた石に躓き転んでしまった。

当然それに気づかないわけがなく

「誰だ！！」

一人の男が近づく。

今更どうこうしても意味がないのであえて飛び出す。

「妖精の尻尾、ソラだ！！お前ら鉄の森だな！！？」

「妖精の尻尾だと！？何でここに！幽閉しといたはず……」

「あんな奴ら程度に捕まらないよ！お前ら！何する気だ！！」

ソラは集団に向かって叫ぶ。

それに対し中心の男、エリゴールは何も話さず手に持っている笛を肩で叩いた。

変わりに答えたのはソラを一度倒した男、カゲヤマ

「はっ！いいか？よく聞け？今エリゴールさんが持つてるのは『ラバイ』、集団呪殺魔法だ。今、駅は俺らが占拠してる。ってことは人がいっぱい集まってるわけだ」

「どういうことだよ！」

「察しが悪いなあ。妖精の尻尾は馬鹿ばかりなのかな？ツキヤハハ！もし、その笛を吹いたらどうなると思う？しかも放送で」

「……まさか！！？」

こいつら魔法を放送して関係ない人も殺そうと！！？

「しゃべりすぎだ」

エリゴールはカゲヤマにそれ以上言わせまいと、声を遮る。

「止めたきやとめな。妖精の尻尾。まあ、できるなら、けどな」

それだけ言うとエリゴールは自身の魔法で空を飛び、部屋を出て行ってしまった。

くっそ！早く止めないと！！

ソラも走り出そうと思ったのだが…

「通すと思うか？ガキ」

目の前に立ちはだかるのは鉄の森構成員。
こいつらを倒さないと先には進めなさそうだ。

「通ってやるって!!」

ソラは集団の中に突っ込んだ。

一方

線路沿いに進んでいたところ、前方の町、クヌギ駅の方で火の手が上がっているのを見て、何かあると思った私達はクヌギ駅で一度止まることにしたんだ。

そして駅に向かってみるとそこは

「なんだ……コレは!?!」

エルザもびっくりするほどのもの。
なぜか巨大な竜巻で駅が覆われていた。

「おいおい、なんだこりゃあ……」

「どうしちゃったわけ!!?!」

「ウプ……」

各々驚きの声を上げた。一人は呻いただけだけどね。ナツは完璧に

酔いでダウン。

と、皆で驚いていると、上空から声が

「ああ？なんだ？てめえら。妖精の尻尾じゃねえか」

そこにいたのは

「エリゴール！！！！」

「エリゴール！？こいつが！」

死神、エリゴール

しかしエリゴールは急いでいるのか

「てめえらも殺してやりてえところだが今回は時間がねえ。中でおとなしくしてな」

私達に魔法をぶつけた

「くっ！！」

「うお！！」

「きゃっ！！」

「ウプ！！」

私達は竜巻の中に入れられてしまった。

エルザはそこから出ようと竜巻につっこむが

「あぐっ！」

バチッという音とともに跳ね返されてしまった

「やめておけ。この魔法、魔風壁は外からの一步通行だ。中から出ようとすれば風が体を切り刻む」

つまり、中に閉じ込められてしまったらしい

「何のマネだ!!」

エルザは叫ぶが

「てめえらのせいで時間を無駄にしちまった。俺はコレで失礼させてもらうよ」

「待て!どこへ行く!!」

エリゴールは颯爽とどこかへ行ってしまった。

「くそっ!何が目的なんだ!？」

「私は駅での大量殺人だと思ったんだけど……どっかいつちゃったし……」

全員で頭をひねる。とはいってもなにがしたいのか皆目検討もつかない。

つと、このままでは埒が明かないと判断した 그레이 は

「エルザ、ここは仕方ない。一度中に入ってみよう。ソラがいるかも知れねえ」

といった。

そういえばソラを探してたんだっけ。

「ああ、そうだな……もしかしたら中にいる奴が何か知ってるかもしれない」

と、言うことで私達は駅構内に入ることにした。
どうか、ソラが無事に、と祈りながら。

「ウプ……」

「てめえら！何してるんだ！たかがガキ一人だぞ！！？」

「だけど、こいつ意外に強……うわ！！」

ソラは着実に鉄の森の奴らの排除にかかっていた。

一人をキープレードで吹き飛ばし、一人を袈裟切りにし、一人を柄の部分で鳩尾を撃つ。それはまるで流れるような動きだ。

カゲヤマはそれを見て、ブルリ、と体を震わせる

（こいつ……列車のときとは大違いだ……何がこいつを変えた！？）

ありえないほどの成長振り。

列車のとき、手を抜いていたとは思えない。

確かに今戦っている奴らはギルドの中でも雑魚に当たるメンバーだが、それでも多少腕は立つ。それがこつも簡単に……

減っていく仲間を見て、一人の男が声を出した。

「く、くそ！ 囲んじまえ！！」

4、5人ぐらいの男がソラを囲むが

「めんどくさいなあ……一気に行くぞ？」

ソラはキープレードの先端に魔力を集めると

「はっ！！」

一気に地面をたたきつけた。

するとソラの魔力はあたりに拡散。ソラの周りを3つほどの魔力の球体が旋回する。

「うが！！」

「ぐほ！！」

「うぎ！！」

男達は球体に吹っ飛ばされ、気絶。

「てめえ！何しやがった！！」

一人の男から声が上がる。ソラはそれに対し

「いや、何って言われてもなあ……思いっただけだし」

と軽く答えた。

ソラ自体は自覚していないが、相当怒りを買った鉄の森のメンバーの一部は

「クソ！！ぜってえこいつを生かして返すな！！」

「やっちまえ！！」

「もう、手加減しねえぞ！！？」

「あれ！？」

今までにないほどの勢いでソラに襲い掛かった。

しかしソラはそれすらも裁ききり、多かった奴も後半分というところまで減らした。

それを見た残りのメンバーは

ゴクリ

と固唾を呑み

次は、俺か……

そう、思いつつも、ソラに向かっていった。

第11話鉄の森（3）（後書き）

ただソラの無双が書きたかっただけですすみません。
今回のアビリティ魔法

エクスプロージョン

たくさん敵を吹っ飛ばす魔法。

キーブレードの先端に魔力を集め、一気に爆散させるって、設定。

感想とか待ってますかもです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7481x/>

FAIRY TAIL 鍵の物語

2011年11月10日01時17分発行